

福島遺跡

ボウガキ地区・入垣地区・東入垣地区

中津市文化財報告 第43集

2008

中津市教育委員会

卷頭図版 1



福島遺跡を望む（白線、福島遺跡）

例 言

- 一、本書は中津市教育委員会が国庫、県費の補助を得て実施した中津地区遺跡群発掘調査事業の内、福島遺跡に関する発掘調査報告書である。
- 一、現場の遺構図面、写真撮影は高崎章子、花崎徹（中津市教育委員会）が行った。
- 一、遺物整理作業は秋吉三和子、岩崎弘子、が行った。
- 一、遺物の実測、写真撮影は高崎、花崎が行い浦井直幸の協力を得た。
- 一、遺構、遺物の製図は金丸孝子（中津市歴史民俗資料館）が行った。
- 一、本書の執筆編集は花崎が行った。
- 一、方位はすべて磁北である。

調査団の構成

調査の体制は以下の通りである。

平成6年度

調査主体	中津市教育委員会
調査指導	賀川 光夫（別府大学教授）（故人） 後藤 宗俊（別府大学教授） 甲斐 忠彦（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗史料館学芸課長）（故人） 真野 和夫（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗史料館調査課長）
調査責任者	高椋 忠隆（中津市教育委員会教育長）
調査事務	土井 勝（中津市教育委員会市民文化センター館長 平成7年1月29日まで） 麻川 尚良（中津市教育委員会市民文化センター館長 平成7年2月1日から）
	田中布由彦（同 係長）
	富田 修司（同 主査）
調査員	清水 宗昭（大分県教育庁文化課埋蔵文化財第1係長）
調査担当	高崎 章子（中津市教育委員会市民文化センター主任） 花崎 徹（同 技師）

平成7年度

調査主体	中津市教育委員会
調査指導	山中 敏史 (奈良県立文化財研究所集落遺跡研究室長) 賀川 光夫 (別府大学教授) (故人) 小田富士雄 (福岡大学教授) 後藤 宗俊 (別府大学教授) 甲斐 忠彦 (大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗史料館学芸課長) (故人) 真野 和夫 (大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗史料館調査課長)
調査責任者	高椋 忠隆 (中津市教育委員会教育長)
調査事務	麻川 尚良 (中津市教育委員会市民文化センター館長) 田中布由彦 (同 係長) 富田 修司 (同 主査)
調査員	清水 宗昭 (大分県教育庁文化課主幹) 宮内 克己 (大分県教育庁文化課主査) 村上 久和 (//)
調査担当	高崎 章子 (中津市教育委員会市民文化センター主任) 花崎 徹 (同 技師)

平成8年度

調査主体	中津市教育委員会
調査指導	賀川 光夫 (別府大学名誉教授) (故人) 小田富士雄 (福岡大学教授) 後藤 宗俊 (別府大学教授) 甲斐 忠彦 (大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗史料館学芸課長) (故人) 真野 和夫 (大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗史料館調査課長)
調査責任者	高椋 忠隆 (中津市教育委員会教育長 平成8年1月31日まで) 前田 佳毅 (中津市教育委員会教育長 平成8年2月1日から)
調査事務	麻川 尚良 (中津市教育委員会市民文化センター館長) 田中布由彦 (同 係長) 富田 修司 (同 主査)
調査員	清水 宗昭 (大分県教育庁文化課主幹)
調査担当	花崎 徹 (同 技師)

平成9年度

調査主体	中津市教育委員会
調査指導	賀川 光夫 (別府大学名誉教授) (故人) 小田富士雄 (福岡大学教授) 後藤 宗俊 (別府大学教授) 和佐野喜久生 (佐賀大学教授)
	甲斐 忠彦 (大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗史料館学芸課長) (故人) 真野 和夫 (大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗史料館調査課長)
調査責任者	前田 佳毅 (中津市教育委員会教育長)
調査事務	麻川 尚良 (中津市教育委員会市民文化センター館長) 田中布由彦 (同 係長) 富田 修司 (同 主査)
調査員	清水 宗昭 (大分県教育庁文化課主幹)
調査担当	高崎 章子 (中津市教育委員会市民文化センター主任) 花崎 徹 (同 技師)

平成10年度

調査主体	中津市教育委員会
調査指導	賀川 光夫 (別府大学名誉教授) (故人) 小田富士雄 (福岡大学教授) 後藤 宗俊 (別府大学教授) 甲斐 忠彦 (大分県立歴史博物館学芸課長) (故人) 真野 和夫 (大分県立歴史博物館調査課長)
調査責任者	前田 佳毅 (中津市教育委員会教育長)
調査事務	尾畑 豊彦 (中津市教育委員会市民文化センター館長) 田中布由彦 (同 係長) 富田 修司 (同 主査)
調査員	小林 昭彦 (大分県教育庁文化課主査)
調査担当	花崎 徹 (同 技師)

平成 12 年度

調査主体	中津市教育委員会
調査指導	賀川 光夫 (別府大学名誉教授) (故人) 小田富士雄 (福岡大学教授) 後藤 宗俊 (別府大学教授) 真野 和夫 (大分県立歴史博物館副館長兼学芸課長)
調査責任者	前田 佳毅 (中津市教育委員会教育長 平成 13 年 1 月 31 日まで) 於久 孝正 (中津市教育委員会教育長職務代行者管理課長 平成 13 年 2 月 1 日から)
調査事務	尾畑 豊彦 (中津市教育委員会市民文化センター館長) 田中布由彦 (同 係長) 富田 修司 (同 主査)
調査員	小林 昭彦 (大分県教育庁文化課副主幹)
調査担当	花崎 徹 (同 技師)

平成 19 年度

調査主体	中津市教育委員会
調査責任者	北山 一彦 (中津市教育委員会教育長)
調査事務	國分 重喜 (中津市教育委員会文化振興課課長) 保科 真 (同 係長) 富田 修司 (中津市教育委員会文化振興課) 高崎 章子 (同) 平田 由美 (同) 花崎 徹 (同) 浦井 直幸 (同)

発掘現場作業は下記の皆さんによる。(敬称略)

湯口ヒロ子 (故人)、黒土勉 (故人)、草野郁雄 (故人)、徳永賀子、黒川ミユキ、辻原霞、神崎文子、小倉真理、中和代、田原文子、植山京子、今永キク子、植山ヨシカ、植山松枝、植山トミ子、山縣信夫、辛島雅美、松本勲、寺内勝美、黒川洋美、長岡久美子、泉貞世、熊谷朝子、岩本敏美、今石智子

目次

第1章 地理と歴史的環境	1
第2章 これまでの調査概要	3
第3章 福島遺跡の調査	5
(1) 平成6年度調査	5
(2) 遺構、出土遺物	6
(3) 平成7年度調査	11
(4) 遺構、出土遺物	11
(5) 平成8年度調査	21
(6) 遺構、出土遺物	21
(7) 平成9年度調査	25
(8) 遺構、出土遺物	25
(9) 平成10年度調査	33
(10) 遺構、出土遺物	33
(11) 平成12年度調査	38
(12) 遺構、出土遺物	38
第4章 小結	42
写真図版	45～55

図版目次

1 図 福島遺跡周辺遺跡分布図…………… 1	36 図 SH-1 出土遺物図…………… 32
2 図 福島遺跡過年度調査位置図…………… 3	37 図 SD-1 実測図、出土遺物図…………… 32
3 図 平成6年度調査区図…………… 5	38 図 平成10年度調査区図…………… 33
4 図 4トレンチ、5トレンチ 7トレンチ実測図…………… 6	39 図 SD-1 実測図…………… 34
5 図 集石遺構実測図…………… 6	40 図 SD-1 出土遺物図…………… 35
6 図 ST-1 実測図…………… 7	41 図 SD-1 出土遺物図…………… 36
7 図 平成6年度出土遺物図…………… 8	42 図 SK-1 出土遺物図…………… 37
8 図 平成6年度出土遺物図…………… 9	43 図 平成12年度調査区図…………… 38
9 図 平成6年度出土遺物図…………… 10	44 図 SD-1 実測図…………… 39
10 図 平成7年度調査区図…………… 11	45 図 SD-1 出土遺物図…………… 40
11 図 1トレンチ実測図…………… 12	46 図 SD-1 出土遺物図…………… 41
12 図 SK-1 出土遺物図…………… 12	
13 図 SK-2、SK-3 出土遺物図…………… 13	
14 図 2トレンチ実測図…………… 13	
15 図 3トレンチ実測図…………… 14	
16 図 3トレンチ出土遺物図…………… 14	
17 図 SD-1 実測図…………… 15	
18 図 SD-1 出土遺物図…………… 16	
19 図 SD-1 出土遺物図…………… 17	
20 図 SD-1 出土遺物図…………… 18	
21 図 SD-1 出土遺物図…………… 19	
22 図 SD-1 出土遺物図…………… 20	
23 図 平成8年度調査区図…………… 21	
24 図 SD-1 実測図…………… 22	
25 図 SD-1 出土遺物図…………… 23	
26 図 平成8年度出土遺物図…………… 24	
27 図 平成9年度調査区図…………… 25	
28 図 SK-1 実測図…………… 26	
29 図 SK-1 出土遺物図…………… 26	
30 図 SK-1 出土遺物図…………… 27	
31 図 SK-1 出土遺物図…………… 28	
32 図 SK-2 実測図…………… 29	
33 図 SK-2 出土遺物図…………… 29	
34 図 SH-1 実測図…………… 30	
35 図 SH-1 出土遺物図…………… 31	

第1章 地理と歴史的環境



1 図 福島遺跡周辺遺跡分布図 (S = 1/25,000)

- | | | | | |
|-------------|--------------|---------------|-------------|-------------|
| 1. 福島遺跡 | 2. ボウガキ遺跡 | 3. 入垣貝塚 | 4. 福島城跡 | 5. 三保遺跡 |
| 6. 城土遺跡 | 7. 加来東遺跡 | 8. 大丸川流域遺跡 | 9. 樋多田遺跡 | 10. 権現島遺跡 |
| 11. 北平横穴墓群 | 12. 森山遺跡 | 13. 寺迫遺跡 | 14. 岩井崎横穴墓群 | 15. 上伊藤田城跡 |
| 16. 前田遺跡 | 17. 安平遺跡 | 18. 野依、伊藤田窯跡群 | 19. 才木遺跡 | 20. 倉迫二ツ塚古墳 |
| 21. 倉迫平遺跡 | 22. 野辺田横穴墓群 | 23. 美濃尾遺跡 | 24. 洗添横穴墓群 | 25. 大坪遺跡 |
| 26. 黒水遺跡 | 27. 大幡城跡 | 28. 加来居屋敷遺跡 | 29. 原口遺跡 | 30. 横遺跡 |
| 31. 清水郎西遺跡 | 32. 清水郎原遺跡 | 33. 稲男田遺跡 | 34. 長者屋敷遺跡 | 35. 中ノ林遺跡 |
| 36. 御澄池周辺遺跡 | 37. 東ノ浦遺跡 | 38. 八並城跡 | 39. 東浦遺跡 | 40. 永添中園遺跡 |
| 41. 梶屋遺跡 | 42. 末広城跡 | 43. 西永添遺跡 | 44. 沖代地区条里跡 | 45. 上池永遺跡 |
| 46. 下池永遺跡 | 47. 大悟法地区条里跡 | 48. 中原遺跡 | 49. 上如水遺跡 | 50. 北原遺跡 |
| 51. 土木貝塚 | 52. 田丸遺跡 | 53. 長久寺貝塚 | 54. 畑中遺跡 | |

大分県中津市は平成17年3月1日の合併で市域面積490.80km²、人口約86,400人である。西は山国川を挟んで福岡県、東は宇佐市、南は日田市、北は周防灘に面する。旧中津市は平野と台地に大別される。ここで福島遺跡周辺の周知遺跡を概観してみる。

旧石器時代の遺跡は、才木遺跡、樋多田遺跡などがあげられる。いずれも後期旧石器時代に属する。資料は断片的で多くを語ることはない。

縄文時代の遺跡は、ボウガキ遺跡、入垣貝塚、土木貝塚、黒水遺跡、槇遺跡などがあげられる。黒水遺跡は縄文時代早期末～前期の陥穴的特徴をもつ土壌が24基、検出されている。陥穴は等高線に沿って並ぶように配置され、主軸がほぼ等高線に対し直行するように掘られている。同様の遺構が市内の諸田遺跡でも検出されている。ボウガキ遺跡は昭和55年民間開発に伴う発掘調査が実施され、縄文時代後期の住居跡と住居内から4基の土壌墓が検出された。また隣接地に入垣貝塚も周知され、セツト関係でとらえられる遺跡である。昭和57年に大分県指定の史跡となった。

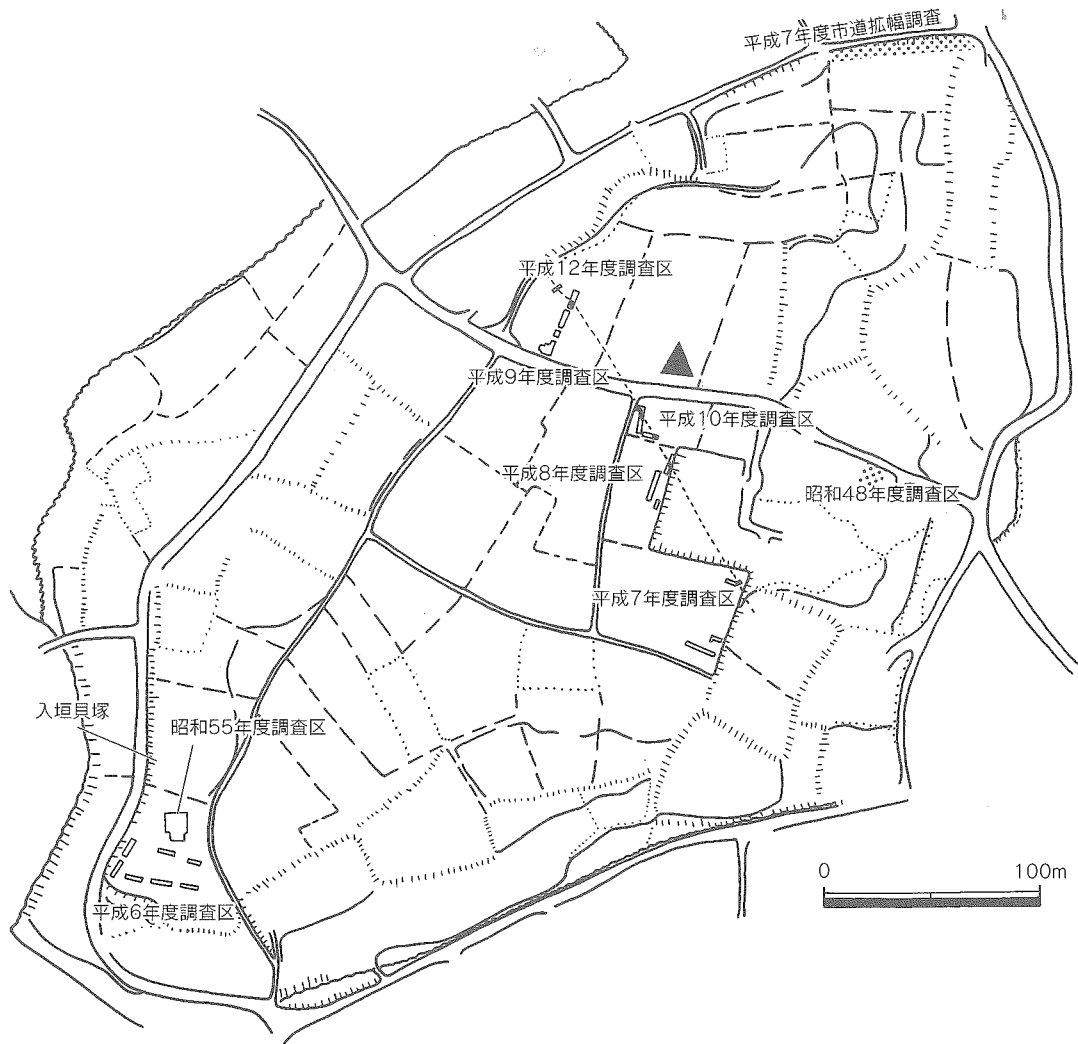
弥生時代の遺跡は福島遺跡、三保遺跡、犬丸川流域遺跡、森山遺跡、北原遺跡、上如水遺跡、上池永遺跡などがあげられる。森山遺跡は標高約59mの丘陵上に位置し弥生時代前期末～後期の集落の全容を検出できた遺跡である。福島遺跡は弥生時代中期の遺跡で、住居跡、溝、土壌墓群などが確認され中津市で最大級の集落の展開が推測される。北原遺跡、上如水遺跡、上池永遺跡は弥生時代の遺物包蔵地として周知される。

古墳時代の遺跡は加来東遺跡、犬丸川流域遺跡、野依、伊藤田窯跡群、岩井崎横穴墓群、北平横穴墓群などがあげられる。集落は微高地や自然堤防上に形成される。犬丸川流域遺跡、樋多田遺跡、加来東遺跡などで集落が確認されている。沿岸部や犬丸川沿いに古墳、横穴が築かれる。岩井崎横穴墓群は52基の横穴が確認され、7世紀頃の墳墓と推定されている。生産遺跡は野依、伊藤田窯跡群があげられる。6世紀後半～9世紀頃まで生産されたと推定される。

古代の遺跡は長者屋敷遺跡、寺迫遺跡、沖代地区条里跡、大悟法地区条里跡などがあげられる。沖代地区条里跡は大分県下最大のもので、南限に古代の官道（推定）が踏襲しており、条里跡との関わりが推測される。長者屋敷遺跡は下毛郡の正倉と考えられる建物群が検出された。推定官道から南に約350m、官道より約5m程小高い台地上に位置する。円面硯、墨書土器などが検出された。現在は盛土保存され周辺の確認調査が期待される。

中世の遺跡は福島遺跡、福島城跡、城土遺跡、上伊藤田城跡、黒水遺跡、大幡城跡、加来居屋敷遺跡などがあげられる。黒水遺跡では近年民間開発の調査と大分県の県道拡幅に伴う調査で方形に区画される溝状遺構が検出されている。溝状遺構の底から朝鮮産の陶器が出土しており、溝は16世紀末頃のものである。また加来居屋敷遺跡でも中世城館に伴うと推定される溝が検出されている。中津市内では15、16世紀に堀や土塁を持つ豪族居館が点在し、各地にその痕跡を現在に残す。

第2章 これまでの調査概要



2 図 福島遺跡過年度調査位置図

1、調査に至る経緯

ボウガキ遺跡は、中津市の北東部に位置し標高約 26m。昭和 55 年民間開発に伴う発掘調査が実施され縄文時代後期の竪穴住居 1 基が検出された。また住居内から土壙墓 4 基が検出されこの時代の葬送観念を考える貴重な報告となり、昭和 57 年に大分県指定の史跡となった。近年この台地上で個人住宅の開発が進みつつある。中津市教育委員会では遺跡の広がりを確認し、開発に対する資料作成を目的に確認調査を実施した。

2、調査の概要

平成 6 年度調査

平成 6 年度の調査は県指定史跡のボウガキ遺跡に隣接する畑地でトレンチを掘削した。ボウガキ遺跡は昭和 55 年、民間開発に伴う調査により縄文後期の住居跡、土壙墓などが検出された。調査の目的はボウガキ遺跡の範囲確認であった。検出した遺構は掘り下げず、遺構の検出面上層で出土した遺物を取り上げたのみである。縄文から中世に至る遺物が検出され、当地は複合遺跡であることが判明した。

平成 7 年度調査

平成 7 年度調査区は平成 6 年度調査区より東北に約 300m の畑地に設定した。平成 7 年度調査区は検出した遺構を一部掘り下げ、遺構の性格、時期の解明に努めた。検出された遺構は土壙 3 基、竪穴住居 1 基、溝状遺構 1 条などである。調査区北側で検出された溝状遺構から大量の弥生土器が検出された。遺物は一括廃棄されたもので、貴重な資料を得ることができた。溝状遺構はさらに北西方向に延びるものと推測された。福島台地上でこの溝の性格を判断するために、溝の延長上に確認調査を実施することとした。

平成 8 年度調査

平成 8 年度調査区は平成 7 年度調査区の北西約 80m の畑地で実施した。検出された遺構は溝状遺構 3 条、ピットなどである。溝を一部掘り下げ、遺物を取り上げた。溝は形態や埋土から平成 7 年度に検出した溝の続きと判断した。溝はさらに北西方向へ直線でのびる。他の遺構は彫り下げをおこなっていないため詳細は不明であるが、溝の続きが確認できたのは大きな成果であった。

平成 9 年度調査

平成 9 年度は平成 8 年度調査区の北西約 80m の畑地で実施した。検出された遺構は溝状遺構 1 条、竪穴住居 1 基、土壙 2 基などである。溝はその形態や方向から前年度まで検出したものとは別の遺構と判断した。竪穴住居跡、土壙から検出された遺物は平成 7 年度の溝状遺構に一括廃棄されたものと時期差が生じた。しかし福島台地上の弥生時代の遺跡の広がりを再認識させられた。

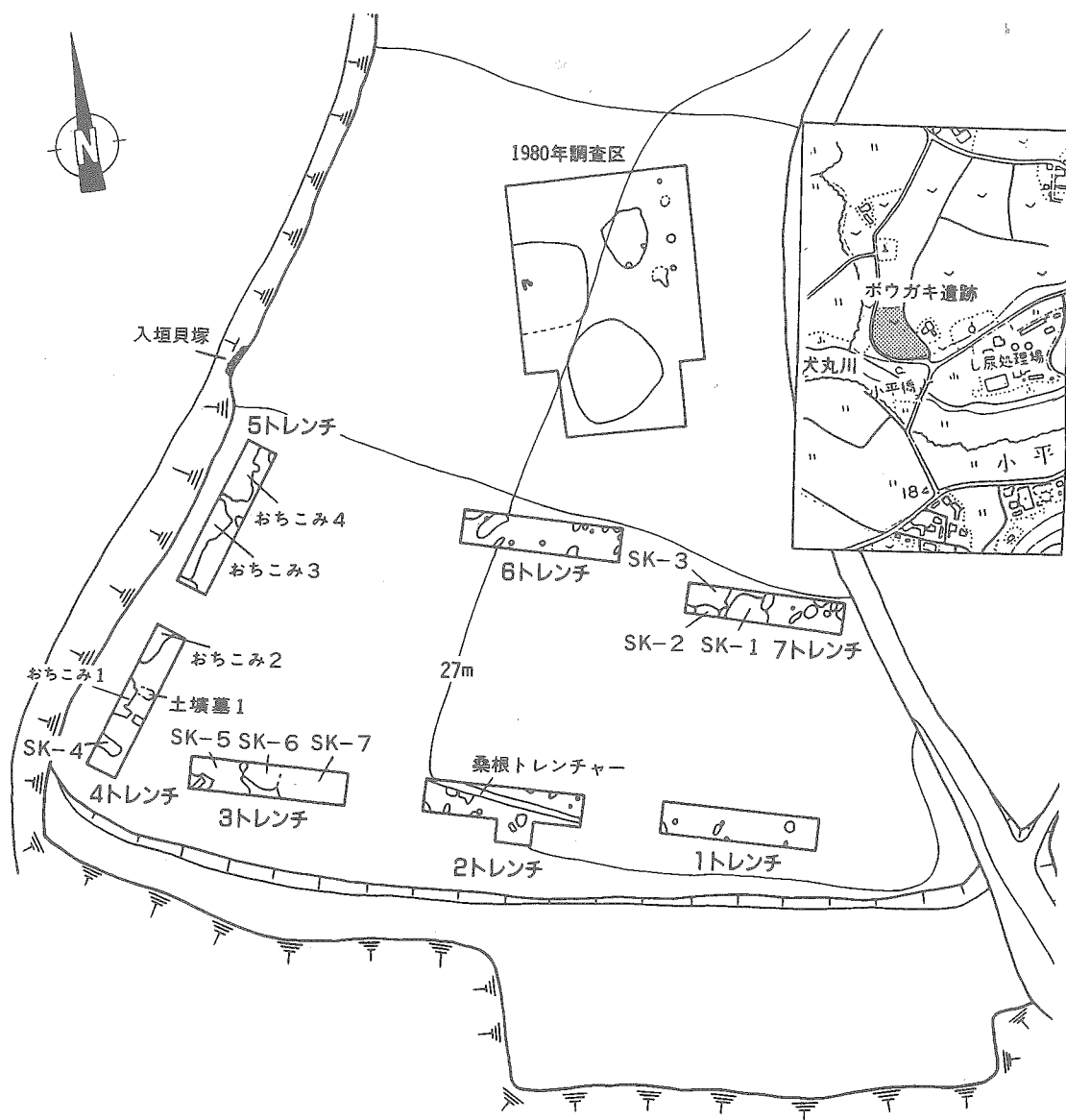
平成 10 年度調査

平成 10 年度調査区は平成 8 年度調査区と 9 年度調査区の上に位置する。溝状遺構の方向を再検討するため実施した。検出された遺構は溝状遺構 1 条、土壙 1 基、ピットなどである。溝は平成 8 年度からの続きのものと判断した。溝の一部を掘り下げ遺物を取り上げた。また土壙検出面で遺物が出土し、これらも取り上げた。

平成 12 年度調査

平成 12 年度調査区は平成 9 年度調査区の北側に隣接する畑地で実施した。検出された遺構は溝状遺構 1 条、ピットなどである。溝は一部掘り下げその形態や埋土を確認した。溝状遺構は平成 10 年度の続きのものと判断した。溝はさらに北西方向に延びる。平成 7 年度から検出された溝状遺構は直線で約 160m 続くことが確認された。

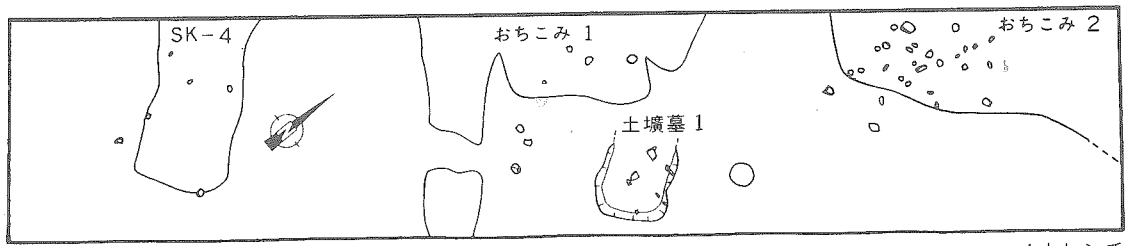
第3章 福島遺跡の調査



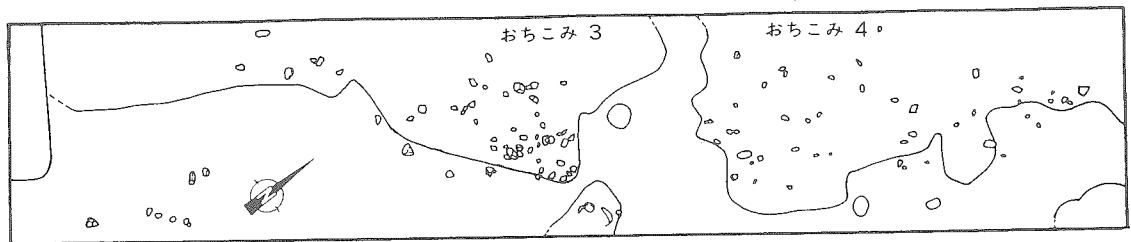
3 図 平成6年度調査区図 (S = 1/400)

(1) 平成6年度調査

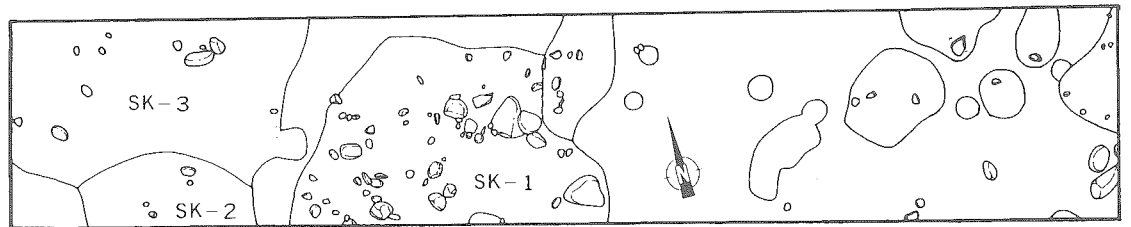
平成6年度の調査区は大分県の史跡に指定された畑地に隣接地で確認調査をおこなった。調査区周辺では耕作された畑の表土で容易に遺物が表採できる。大量の遺物の包蔵が期待されたので、人力でトレンチの掘り下げをおこなった。調査区内にトレンチを7本設定した。遺構検出面までの層序は表土から約20cmは褐色の耕作土。これより約20cm下層は褐色でしまった土層。土師質土器片、須恵器片などを少量含む。この層より約30cm下層は黒褐色の粘質土で縄文土器、弥生土器、須恵器など遺物を含む。遺構はこの層から掘り込まれていると推測されるが、遺構含土と酷似し遺構の検出ができなかった。黒褐色の下層は黄褐色の地山になり、遺構が検出された。1トレンチはピットが数基検出された。土層は前記のとおりである。土器片は弥生から中世の土器片が検出された。2トレンチも1トレンチと同じ状況であった。中央部に桑を栽培した時に掘り込まれた溝状の掘り込みが検出された。遺物も1トレン



4トレンチ



5トレンチ



7トレンチ

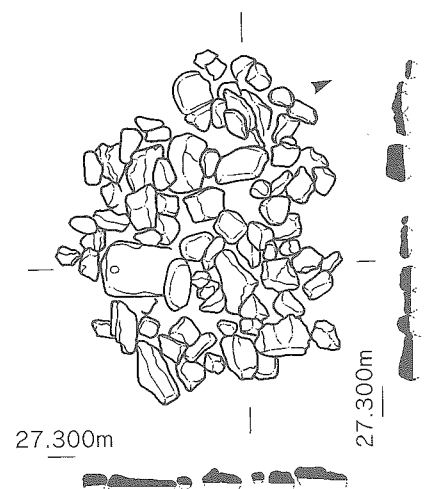
4図 4トレンチ、5トレンチ、7トレンチ実測図 (S = 1/60)

チと同様であった。3トレンチからは土坑と推測される遺構が3基検出された。SK5はトレンチの最西端で検出された。検出面の上層で8世紀代の須恵器の蓋が出土した。形状は不明。SK6はトレンチの中央やや西よりで検出された。検出面からの遺物はほとんどなく、SK7との切り合いも遺構検出面では不明瞭な状態であった。形状は不明。SK7はトレンチの中央部から東端までで、全景は不明。遺構検出面で弥生土器の甕の底部が検出された。4トレンチからは土坑1基、土坑墓1基などが検出された。SK4はトレンチの西の外にのびる土坑で、埋土は黒褐色である。土坑墓はトレンチの中央部で検出された。5トレンチは表土から約90cm掘り下げて、黄褐色の地山に達した。縄文時代の遺構は中世の包含層によりカットされた状態であった。6トレンチからはピットが数基検出された。ピットからは弥生から中世の土器片が検出された。7トレンチからは土坑3基、ピット数基が検出された。SK1はトレンチの中央部、SK2はトレンチの南西部、SK3はトレンチの北西部に位置しいずれも全景は不明。SK1の遺構検出面で縄文土器を検出した。

(2) 遺構、出土遺物

遺構

今回の調査では検出された遺構は掘り下げずに遺構ラインの検



5図 集石遺構実測図 (S = 1/40)

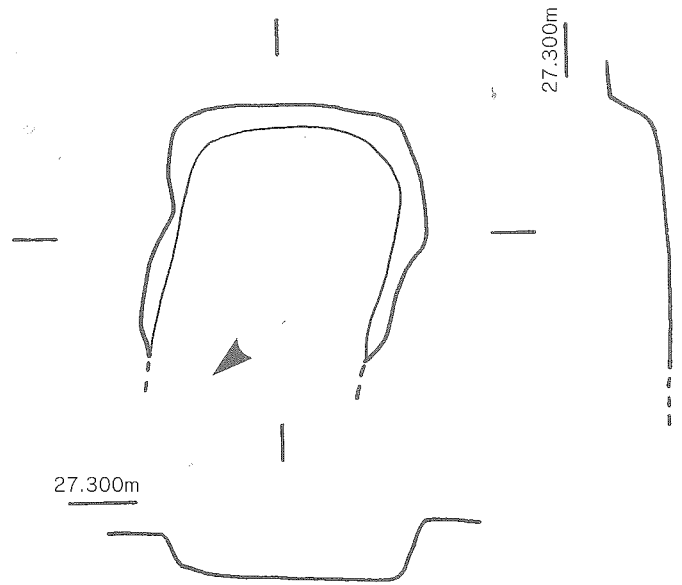
出のみおこなった。遺構検出で性格が明らかになった遺構は土坑墓1基、集石遺構1基である。

集石遺構

180cm × 140cm ほどの範囲に広がる集石で20～30cm 前後の礫が地山直上に広がる。

土坑墓

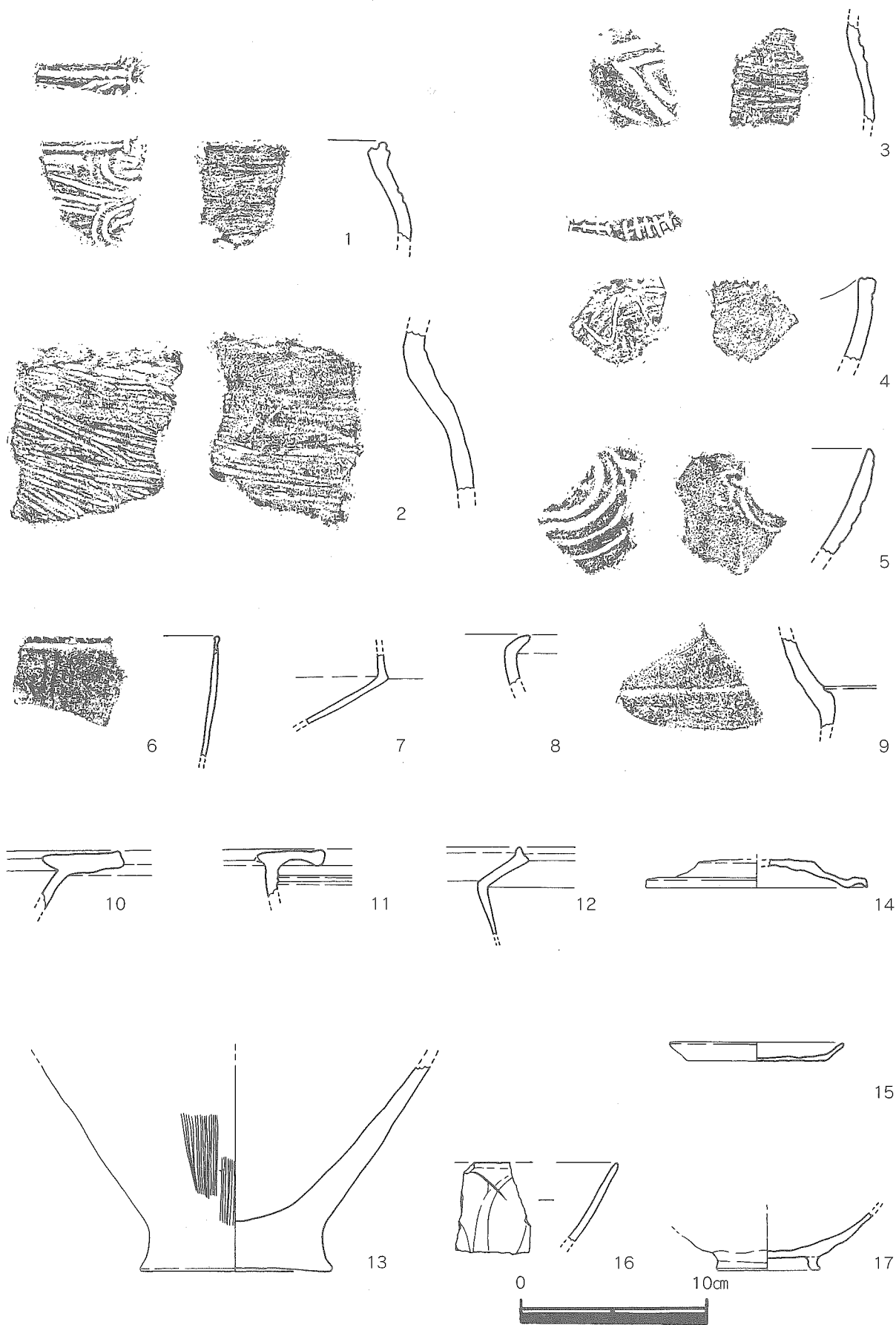
4 トレンチの中央部で検出された。依存状態は悪く、頭骸骨の後頭部と、右上腕骨、右鎖骨のみで上半身は削平された状態であった。遺構埋土は別の縄文時代の土器を含む遺構と酷似する。



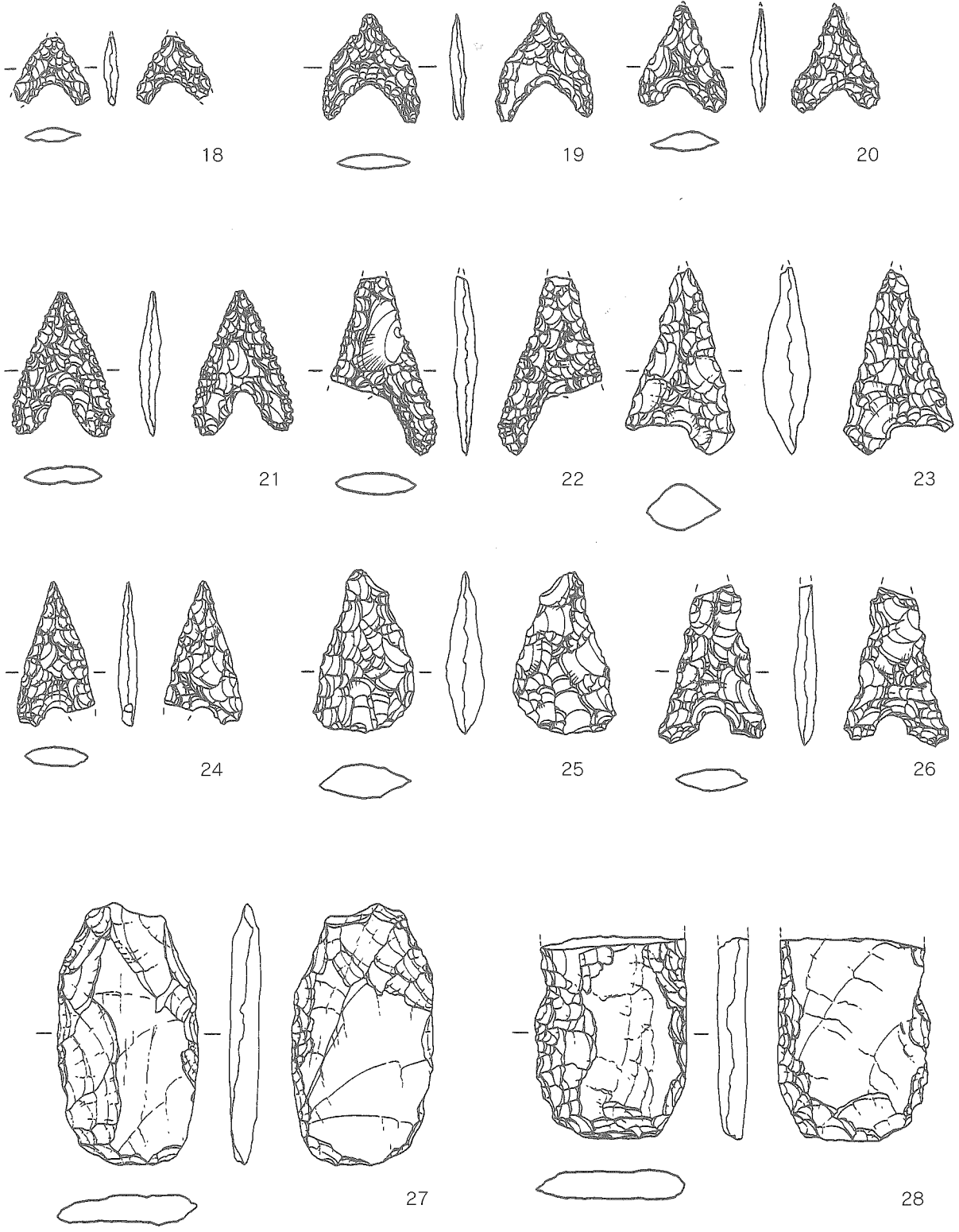
6 図 ST-1 実測図 (S = 1/20)

遺物

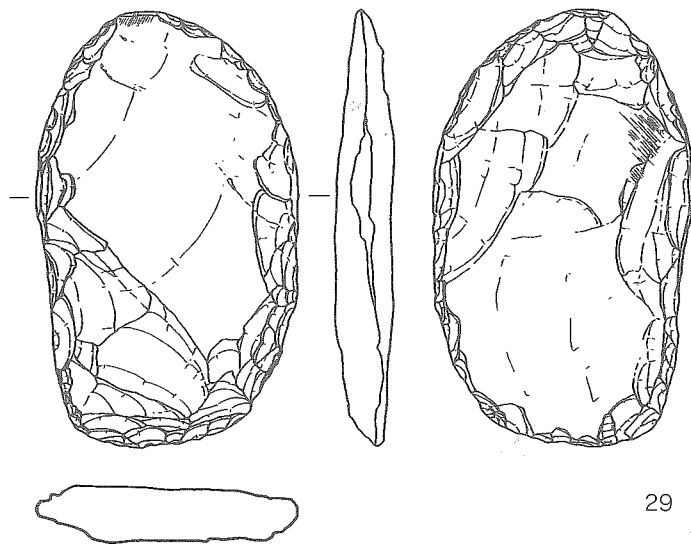
1 は口縁部にそって沈線文が施され、体部の沈線はカーブを画く。内面は貝殻による調整痕が施される。2 は内外面とも貝殻による調整痕を残し、内面上部をなでけす。3 は外面に沈線文が、内面に貝殻による調整痕が施される。4 は口縁波頂部にあたる。口縁部にそって一条の沈線を描き、直行する刻みをいれている。体部外面はくき状のもので波状文を画く。5 は鉢の口縁部で、突起があると思われる場所を渦状の沈線で囲む。6～9 はSK1 から検出された。6 は内面が黒色で磨きを施す。先の丸い口縁部には刻みが並ぶ。口縁直下に焼成後1ヶ所穴を穿つ。7 は胴部が屈曲する浅鉢になると思われる。8 は壺形土器の口縁部で内外面とも磨きを施す。9 は壺の肩の部分で段がつく。10～13 は1～3 トレンチで出土した弥生土器である。10 は高坏もしくは壺の口縁部である。断面鋤先状を呈する。11 は甕の口縁部で、口縁直下に2条の三角突帯をめぐらす。12 は頸部で屈曲する甕で口縁部先端は上方に跳ね上げる。13 はSK7 から検出された甕の底部である。底径10cmを測る。14 はSK5 から出土した須恵器の坏蓋である。復元口径11.8cm。15 は土師質土器の小皿で口径9.1cm、器高0.9cm、底径7.3cm。16 は青磁碗の口縁部。17 は土師質土器の碗の底部である。底径5.4cm。18～26 は石鏃である。18 は最大長1.15cm、重さ0.24g。石材は姫島産黒曜石。19 は最大長1.8cm、重さ0.5g。石材は姫島産黒曜石。20 は最大長1.75cm、重さ0.55g。石材は姫島産黒曜石。21 は最大長2.4cm、重さ1.08g。石材は産地不明の黒曜石。側縁は鋸歯状に仕上げられる。22 は最大長2.95cm、重さ1.24g。石材は産地不明の黒曜石。21と同じ石材であろう。23 は最大長3.1cm、重さ2.59g。石材は姫島産黒曜石。24 は最大長2.4cm、重さ0.66g。石材は姫島産黒曜石。25 は最大長2.7cm、重さ2.39g。石材は姫島産黒曜石。脚部は両方を欠する。26 は最大長2.65cm、重さ1.27g。石材は姫島産黒曜石。先端部を欠する。27から30は緑泥片岩の打製石斧である。27は最大長8.75cm、重さ56.46g。28は最大長6.75cm、重さ61.34g。29は最大長11.5cm、重さ182.93g。刃部が摩滅している。30は最大長10.7cm、重さ131.41g。31は石ノミか。最大長12.15cm、重さ101.26g。



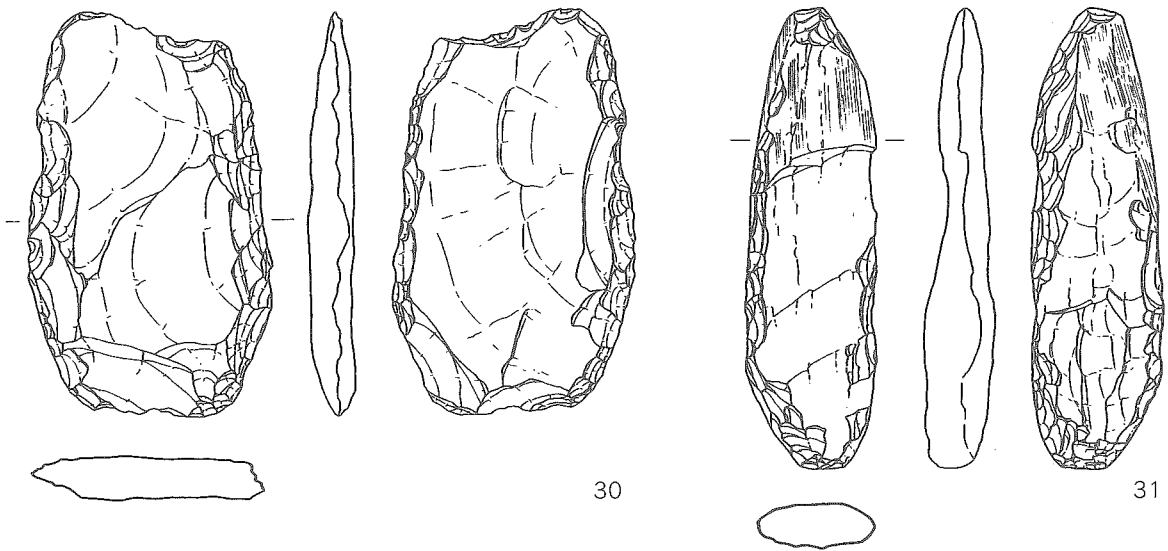
7 図 平成 6 年度出土遺物図 (S = 1/3)



8 图 平成 6 年度出土物遺物图 (18 ~ 26 S = 1/1) (27、28 S = 1/2)



29



30

31

9 図 平成 6 年度出土遺物図 (S = 1/2)

(3) 平成7年度調査

平成7年度調査区は台地の東南の畑地でトレンチを3本設定し調査をおこなった。前年度調査区より約300m東に位置する。遺跡の広がりを確認することと、一部遺構を掘り下げ時期と性格の判断をおこなった。1トレンチで検出された遺構は弥生時代の土坑1基(SK1)、平安時代の土坑2基(SK2、SK3)、性格不明遺構1基(SX1)などである。2トレンチで検出された遺構は時期不明の竪穴住居1基(SH1)である。3トレンチで検出された遺構は弥生時代の溝状遺構1条(SD1)、ピット12基である。

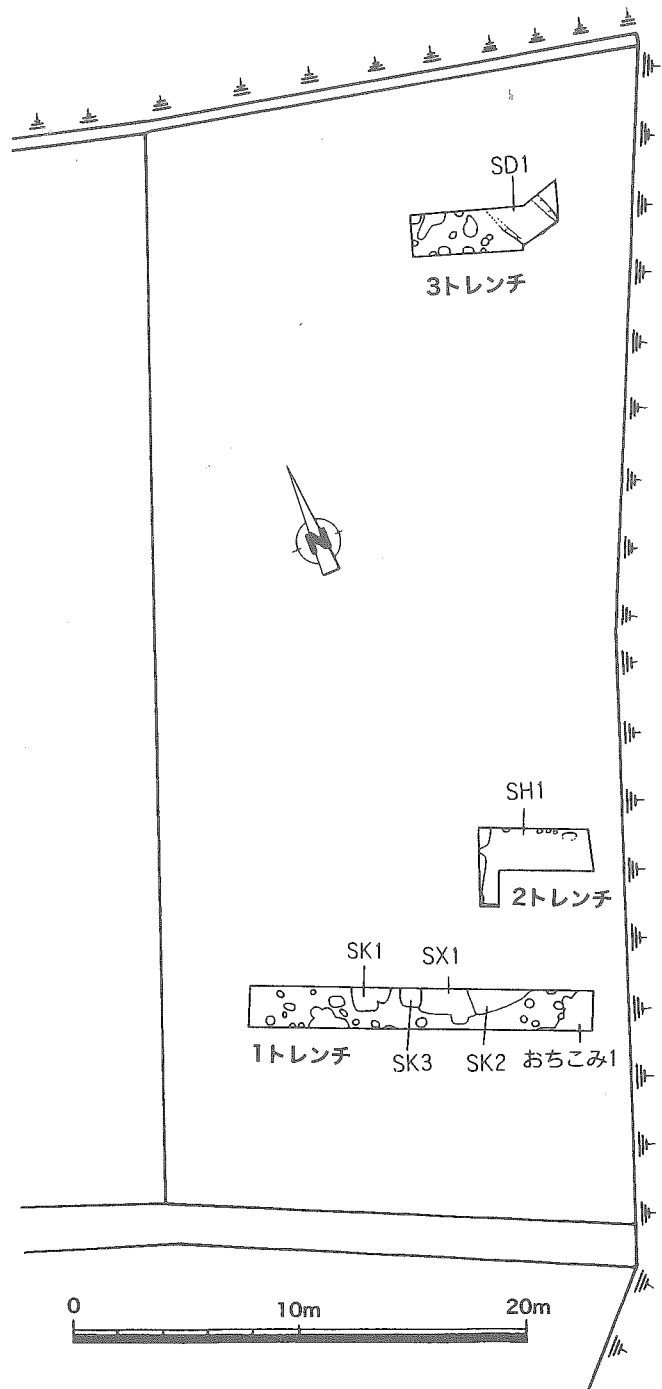
(4) 遺構、出土遺物

SK1

SK1は1トレンチの中央やや西よりで検出された。全景は不明。一部掘り下げ遺物を検出し取り上げた。掘り下げた部分で深さ約35cm、黒褐色の埋土であった。32~37はSK1から出土した弥生土器である。32~35は甕の口縁部である。32の端部はやや肥厚する。胴部に二本の沈線を施す。33の口縁部はやや外反ぎみ。胴部に一本の沈線を施す。34の口縁部は肥厚し、やや外反ぎみ。摩滅が著しくハケメが僅かに残る。35の口縁部は上外方へのびる。胴部に一本の沈線を施す。36は甕の底部である。上げ底で底径6.6cmを測る。外面は丁寧なナデ調整。遺構の一部を完掘したのみであるがこの土坑は、土器の一括廃棄をおこなったものであろう。

SK2

SK2は1トレンチの中央で検出された。全景は不明。一部掘り下げて遺物を検出し取り上げた。掘り下げた部分で深さ約15cm、東西の幅は約50cmを測る。黒褐色の埋土であった。38は土師器の坏でSK2の底から検出された。復元口径12.1cm、器高3.3cm、底径5.7cmを測る。口縁端部はやや肥厚し外反ぎみ。



10図 平成7年度調査区図

SK3

SK3は1トレンチの東側で検出された。全景は不明。一部を掘り下げて遺物を取り上げた。掘り下げた部分で深さ約30cmを測る。床面はフラットで埋土は黒褐色であった。39、40は須恵器の蓋である。39は復元口径28cmを測る。天井部に回転ヘラ削り後にナデ調整を施す。40は口径12.9cm、器高3.3cmを測る。平坦な天井部から口縁部は屈曲し垂下する。41は土師器の小皿か。復元口径10.5cmを測る。

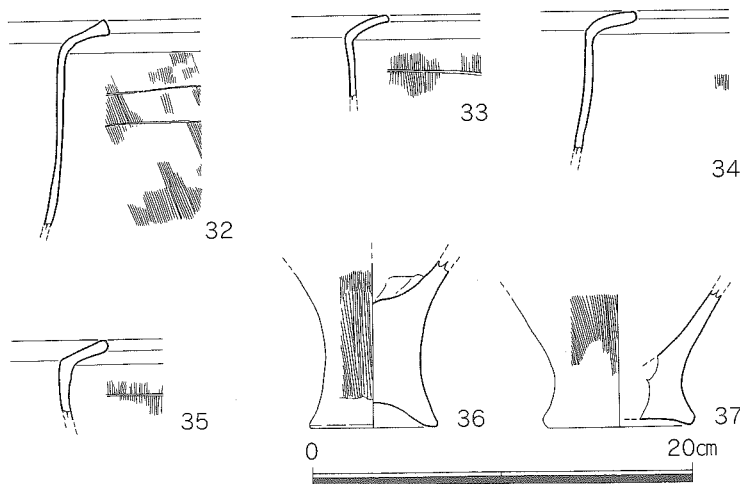
SX1

SX1は1トレンチの中央で検出された。全景は不明。東側をSK3に西側をSK2に切られる。遺構検出面より10cm掘り下げて床面に達した。床はフラットであった。出土遺物は小片のみである。

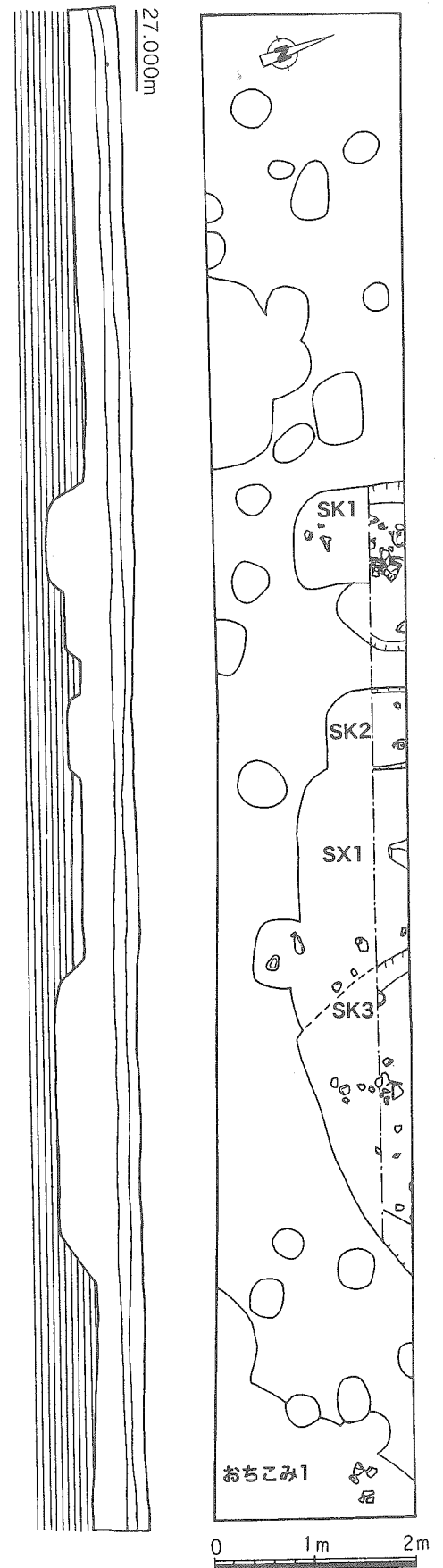
SH1

SH1は2トレンチで検出された。住居全景は不明であるが、方形プランのものと推測される。一部20cmほど掘り下げて床面に達した。床面はフラットで、ピット状の遺構を4基検出した。住居内西側で焼土及び乳白色の粘土の塊を検出した。この住居の竈であろう。遺物は住居内で確認できなかったが、住居検出面上層で、有蓋高坏の身が検出された。6世紀後半に比定される。

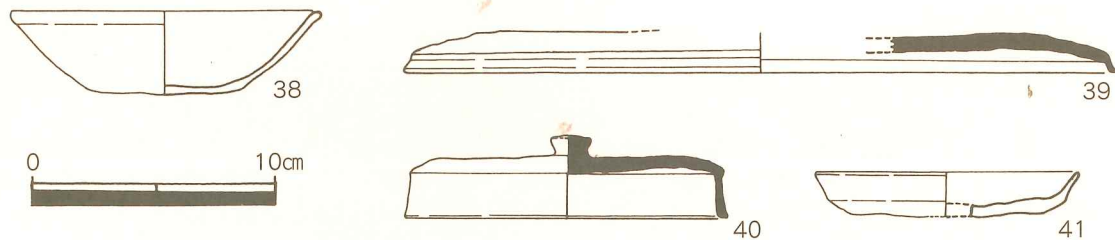
また3トレンチの西側で石剣(42)の未製品が出土した。遺構にはともなわず、黒褐色の層から検出された。最大長24.45cm、重さ366.21g、最大厚2.25cm、最大幅6.4cm。石材は緑泥片岩。



12図 SK-1 出土遺物図 (S = 1/4)



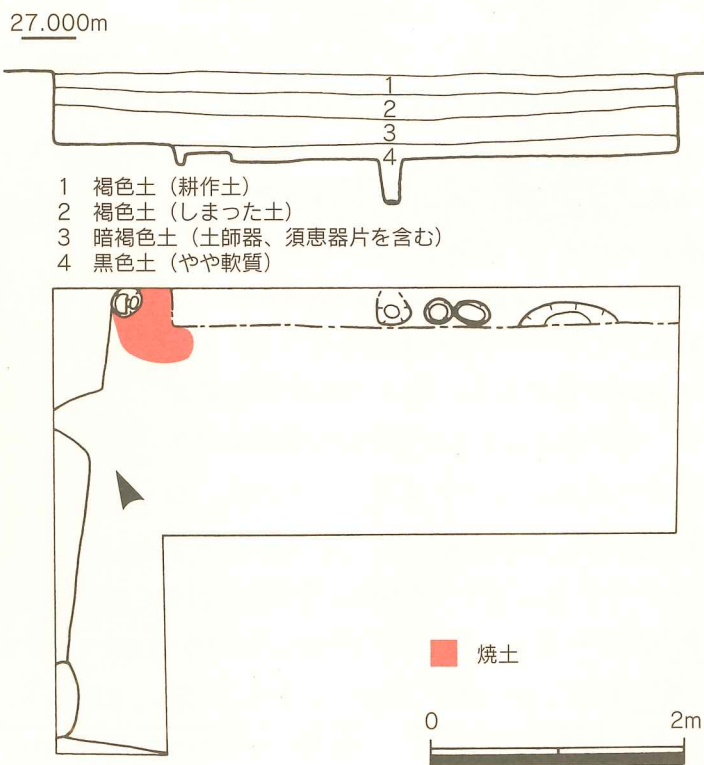
11図 1トレンチ実測図



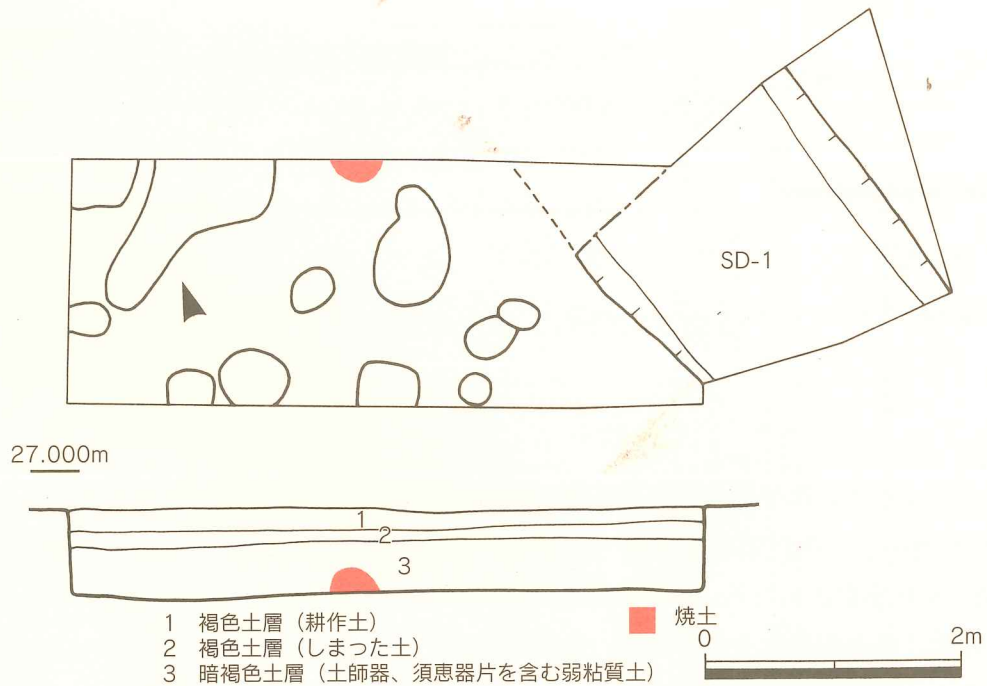
13 図 SK-2 SK-3 出土遺物図 (S = 1/3)

SD1

SD1 は3トレンチの西側で検出された。溝の幅は約2m、深さ約50cm、断面は逆台形であった。溝は南北方向にのびる。やや粘質の暗褐色土とともに大量の弥生土器が出土した。土器はばらばらに破砕されており、一括廃棄されたものと思われる。43は弥生土器の鉢である。口径24.6cm、器高16.8cm、底径6cmを測る。外面底部にミガキ調整。色調は橙褐色で焼成は良好である。44～94は甕になる。44は口径27.4cm、器高32.3cm、底径7.6cmを測る。口縁部は「L」字に屈曲する。外面はハケメ調整。45は口径22.2cm、器高24.1cm、底径6.9cmを測る。外面胴部はハケメ調整。焼成は良好。46は口径28.9cmを測る。胴部外面に三条の沈線を施す。色調は淡褐色。47は口径31.8cmを測る。口縁端部は肥厚する。色調は暗褐色。48は復元口径24.8cmを測る。外面はハケメ調整。色調は淡褐色。49は口径23.8cmを測る。外面はハケメ調整。色調は暗褐色。50は復元口径24.5cmを測る。胴部外面に一条の沈線を施す。色調は淡橙褐色、焼成は良好。51は復元口径28.6cmを測る。外面はハケメ調整。色調は橙褐色、焼成は良好。52は口径29.5cmを測る。口縁直下に横方向のケズリ調整。外面に丹塗り痕か。53は復元口径25cmを測る。胴部に一条の沈線を施す。色調は暗褐色、焼成は良好。54は復元口径32.6cmを測る。外面はハケメ調整。色調は暗褐色、焼成は良好。55は復元口径26.6cmを測る。胴部に二条の沈線を施す。色調は暗褐色、焼成は良好。56は口径29.9cmを測る。口縁部は「く」字に屈曲し端部は肥厚する。胴部に一条の沈線を施す。胴部外面に丹塗り痕か。57～68は口縁部を「く」字に屈曲するものである。61の口縁部は肥厚する。62は口縁直下に二条の沈線を施す。68は口縁端部に一条の沈線を

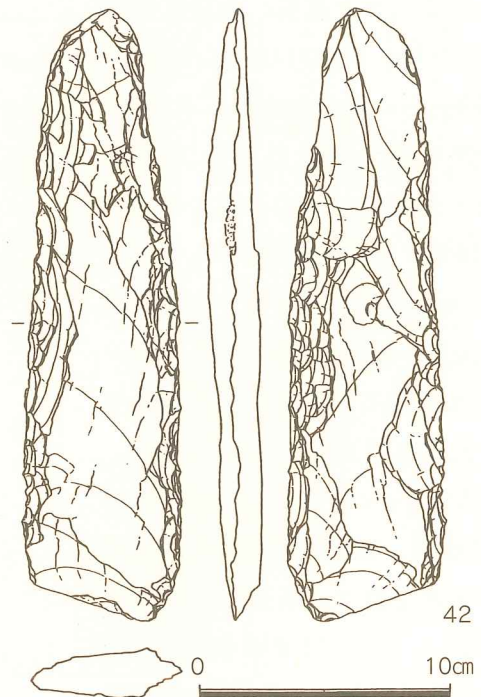


14 図 2トレンチ実測図 (S = 1/60)

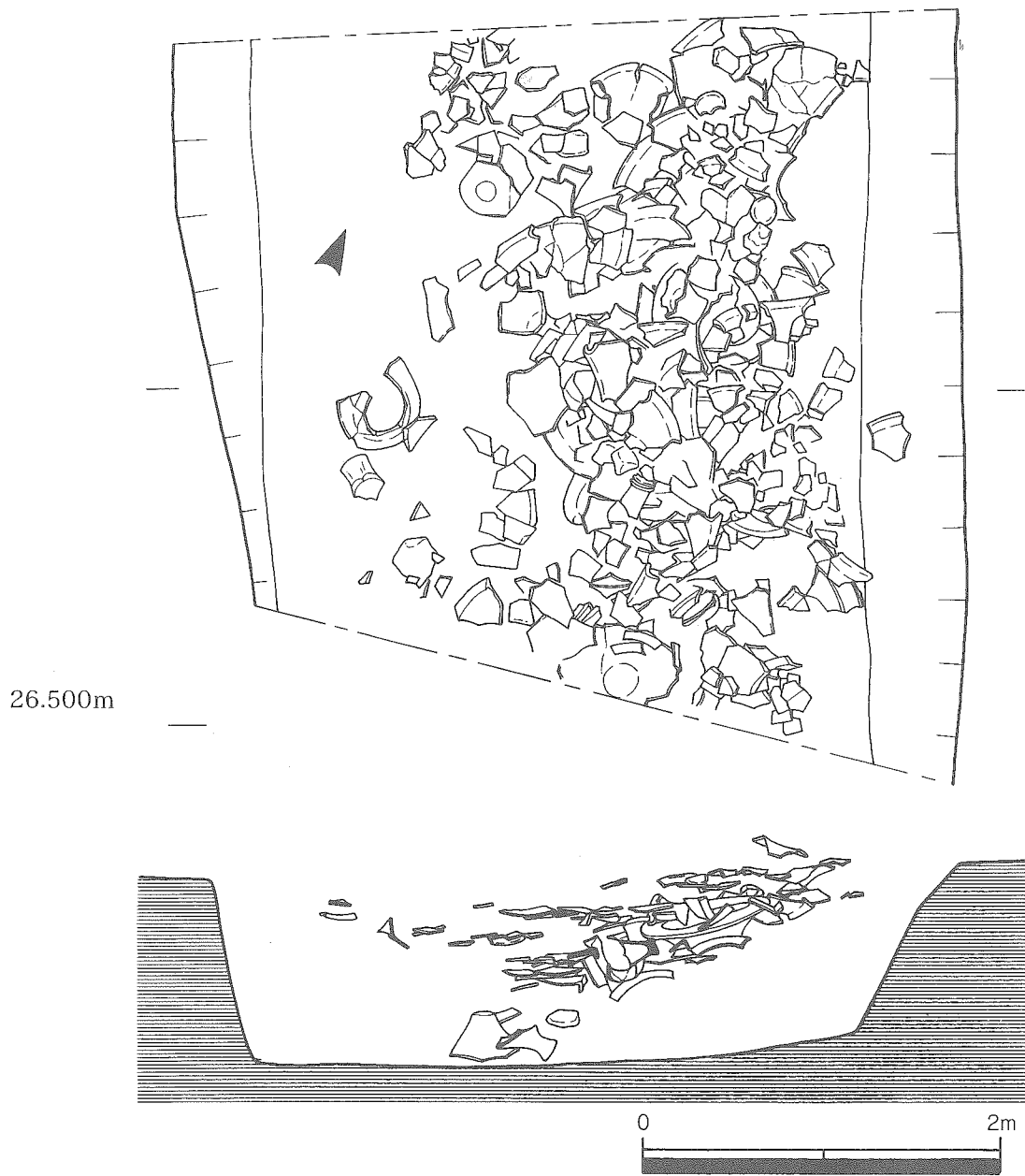


15 図 3 トレンチ実測図 (S = 1/60)

施す。69は復元口径27.8cmを測る。口縁端部は上下方に僅かにのびる。69は復元口径27.8cmを測る。外面はハケメ調整。色調は橙褐色、焼成は良好。70は口径26.2cmを測る。外面はハケメ調整。色調は暗褐色、焼成は良好。71～77は口縁部が「く」字に屈曲するものである。75の口縁端部は上方にのびる。76は復元口径27.6cmを測る。外面はハケメ調整。色調は淡褐色、焼成は良好。78は口縁直下に刻み目突帯を有する。外面はハケメ調整。色調は淡褐色、焼成は良好。79は口縁部に三角の突帯を有し、口縁直下にも一条の三角突帯を有する。突帯には刻みが施される。80～82は口縁部が「く」字に屈曲し直下に三角の突帯をめぐらすものである。80の外面はハケメ調整。色調は橙褐色、焼成は良好。81は復元口径27.4cmを測る。色調は淡褐色、焼成は良好。外面は摩滅が著しくハケメが僅かにのこる。82は口径29.7cm、器高33.4cm、底径8.5cmを測る。外面はハケメ調整。色調は暗橙褐色、焼成は良好。83～94は甕の底部である。83は底径7.6cmを測る。焼成後に直径1cmほど

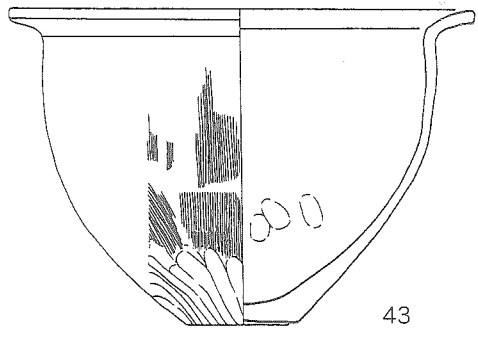


16 図 3 トレンチ出土遺物図 (S = 1/3)

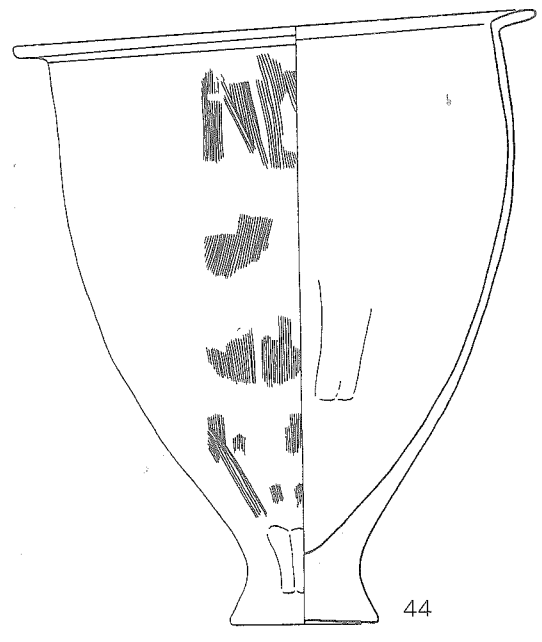


17 図 SD-1 実測図 (S = 1/20)

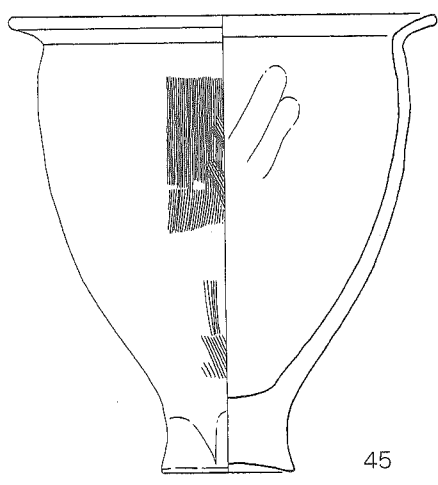
の円孔を穿つ。84 は底径 7.4cm を測る。83 と同様の円孔がみられる。85 は底径 7.1cm を測る。86 は底径 7cm を測る。外面はハケメ調整。色調は暗褐色、焼成は良好。87 は底径 7.3cm を測る。僅かに上げ底。88 は底径 8cm を測る。89 は底径 6.4cm、90 は 7.3cm を測る。91 は底径 7.8cm、92 は 6.4 cm を測る。外面にハケメ調整。93 は底径 7cm を測る。色調は橙褐色、焼成は良好。94 は底径 7cm を測り、上げ底。95 ~ 109 は壺になる。95 ~ 99 は断面鋤先状の口縁部である。95 は口径 24.2cm を測る。内面に横方向のミガキ調整。96 は口径 25.2cm を測る。内面に横方向のミガキ、外面に縦方向のケズリ調整。97 は口径 30.8cm を測る。内面に横方向のミガキ調整。口縁部に丹塗痕がみられる。98



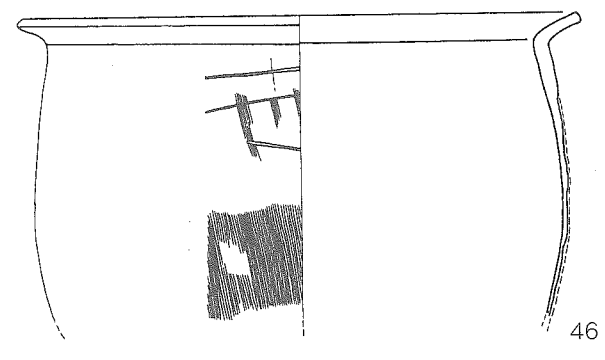
43



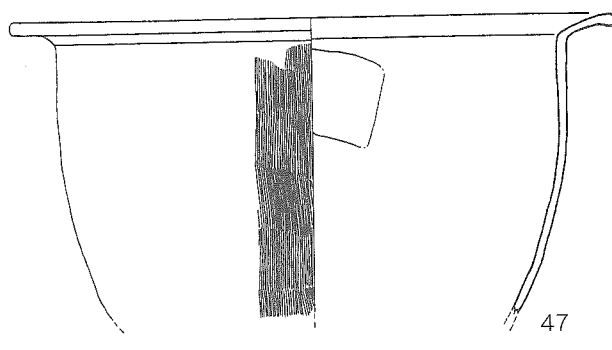
44



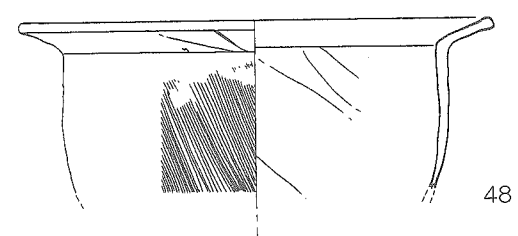
45



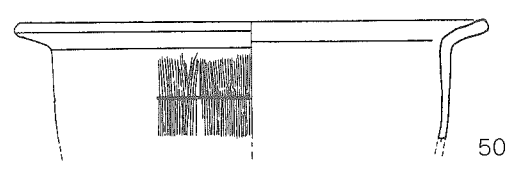
46



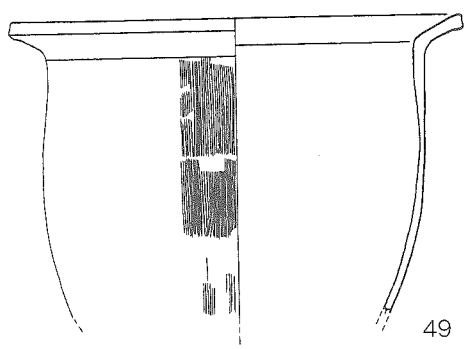
47



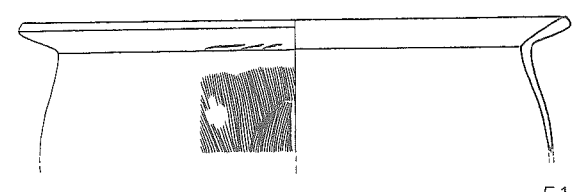
48



50



49



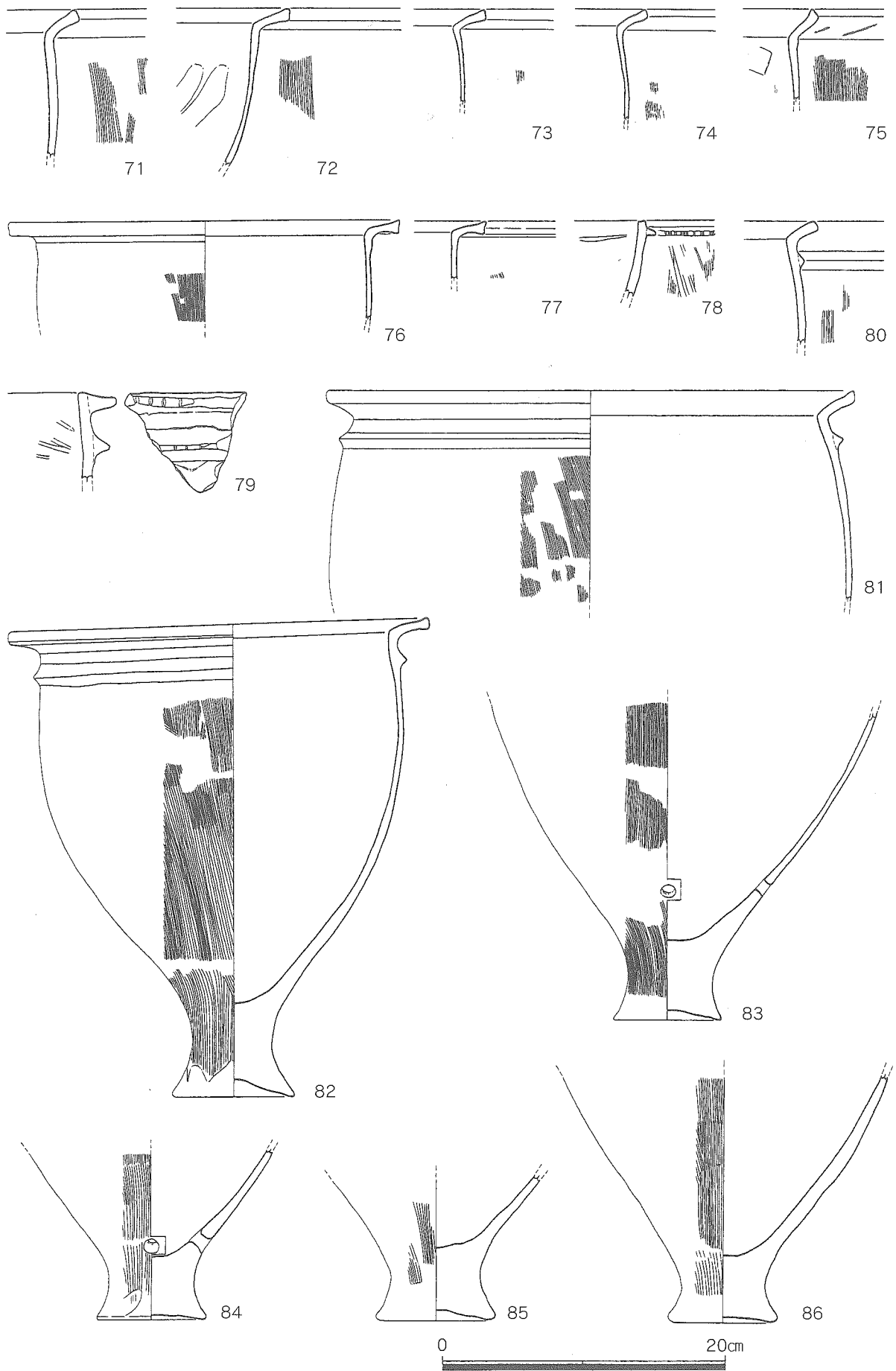
51



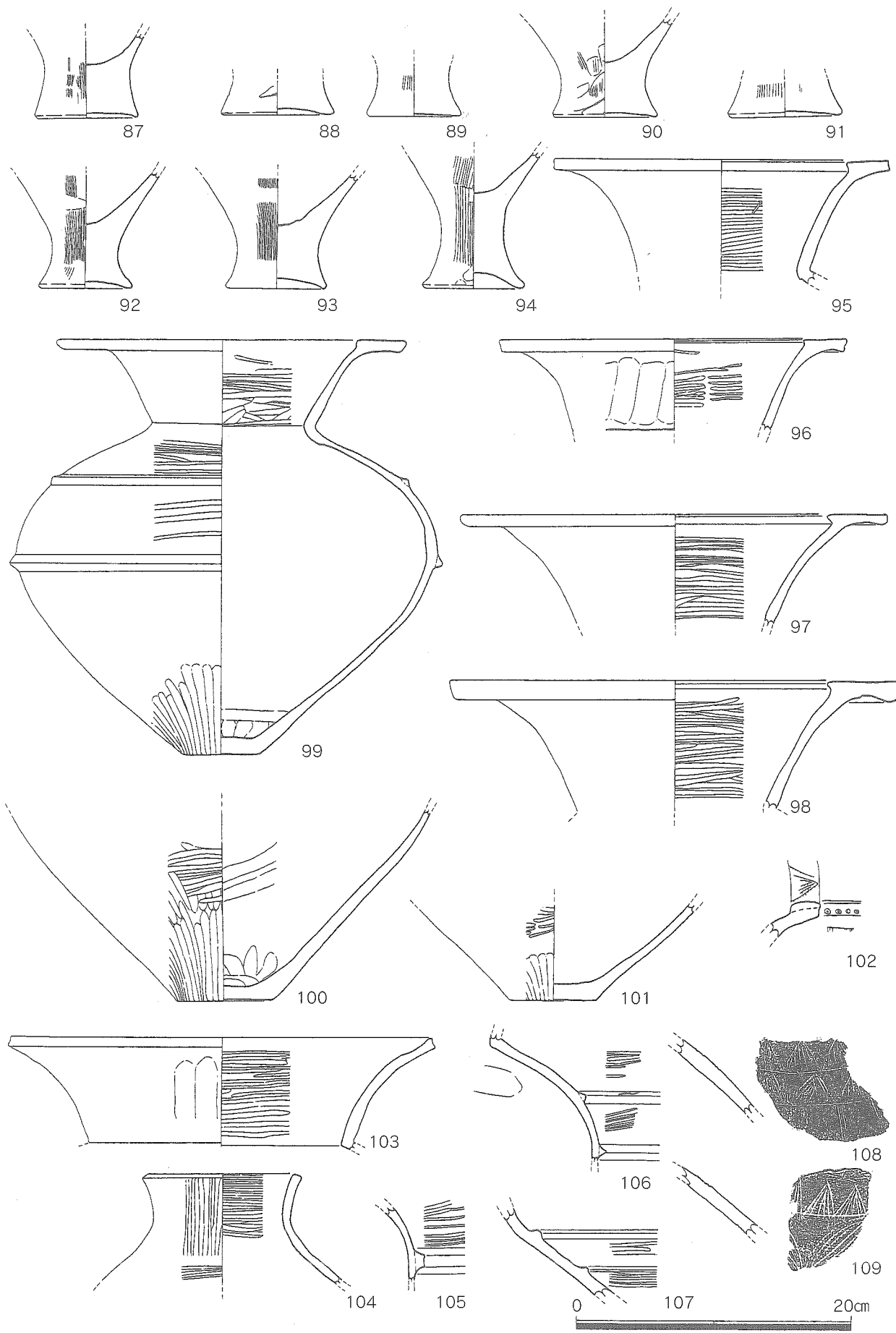
18 图 SD-1 出土遺物图 (S = 1/4)



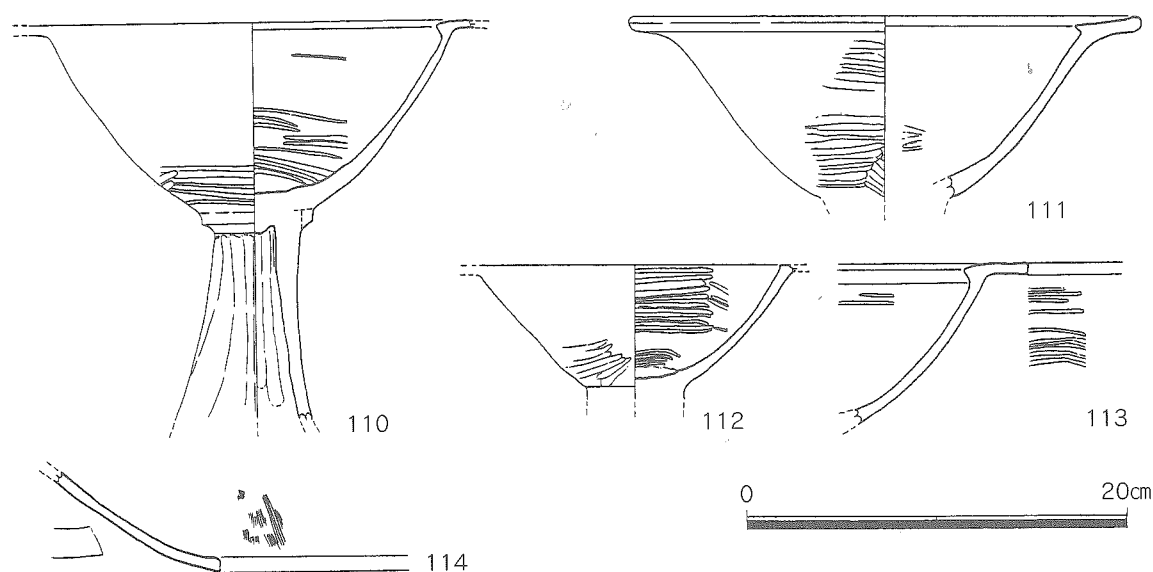
19 图 SD-1 出土遺物图 (S = 1/4)



20 图 SD-1 出土遺物图 (S = 1/4)



21 图 SD-1 出土遺物图 (S = 1/4)



22 図 SD-1 出土遺物図 (S = 1/4)

は口径 32.6cm を測る。内面は横方向のミガキ調整。丁寧な作りである。色調は暗褐色、焼成は良好。99 は口径 25.6cm、器高 30.2cm、底径 5.6cm を測る。外面胴部に二条の三角突帯をめぐらし、ミガキ調整。口縁直下内面にもミガキ調整。100、101 は壺の底部である。100 は底径 7cm を測る。外面はミガキ調整。色調は淡褐色、焼成は良好。101 は底径 6.2cm を測る。作りが丁寧である。102 は口縁端部が肥厚し、水平面に貝殻による山形紋、外周に竹管紋をめぐらす。103 は素口縁で朝顔型に開くもの。復元口径 30.8cm を測る。内面はミガキ調整。104 は長頸壺の口縁部。復元口径 10.8cm を測る。内外面ともミガキ調整。105 ~ 109 は壺の胴部になると思われる。105 は断面台形の突帯をめぐらすもの。106 は断面三角の突帯を二条めぐらす。107 は断面台形を二条めぐらすものである。108、109 は胴部に貝殻による紋様を施すものである。108 は山形紋、109 は木の葉紋をめぐらす。110 ~ 113 は口縁部が鋤先状の高坏になる。110 は口径 19.5cm を測る。体部と脚部の境に三角の突帯をめぐらす。内外面はミガキ調整。111 は復元口径 20cm を測る。内外面はミガキ調整。112 は復元口径 15.6cm を測る。内外面はミガキ調整。やや小ぶりである。113 も内外面はミガキ調整。丹塗り痕がみられる。114 は蓋になると思われる。外面はハケメ調整。

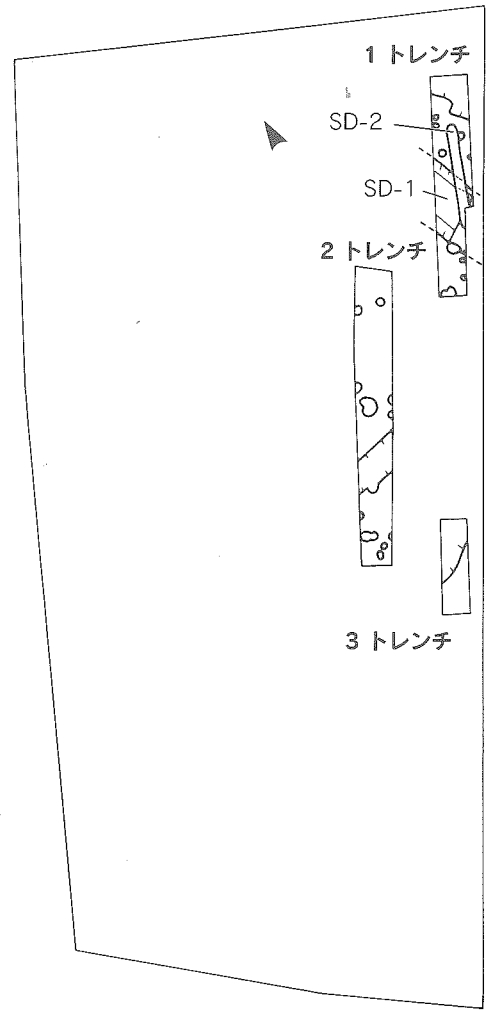
(5) 平成 8 年度調査

平成 8 年度の調査区は平成 7 年度に検出した溝の延長検出を目的に調査区を設定した。平成 7 年度調査区と平成 8 年度調査区の間は近代に土取りがおこなわれ、その姿はない。調査区に 3 本のトレンチを設定した。1 トレンチでは溝状遺構 2 条 (SD1、SD2)、ピット多数が検出された。2 トレンチでは溝状遺構 1 条、ピット多数である。3 トレンチでは不明遺構 1 基であった。検出した溝状遺構の 2 条のみ一部掘り下げて遺物を取り上げた。他の遺構は遺構ラインの検出のみおこなった。

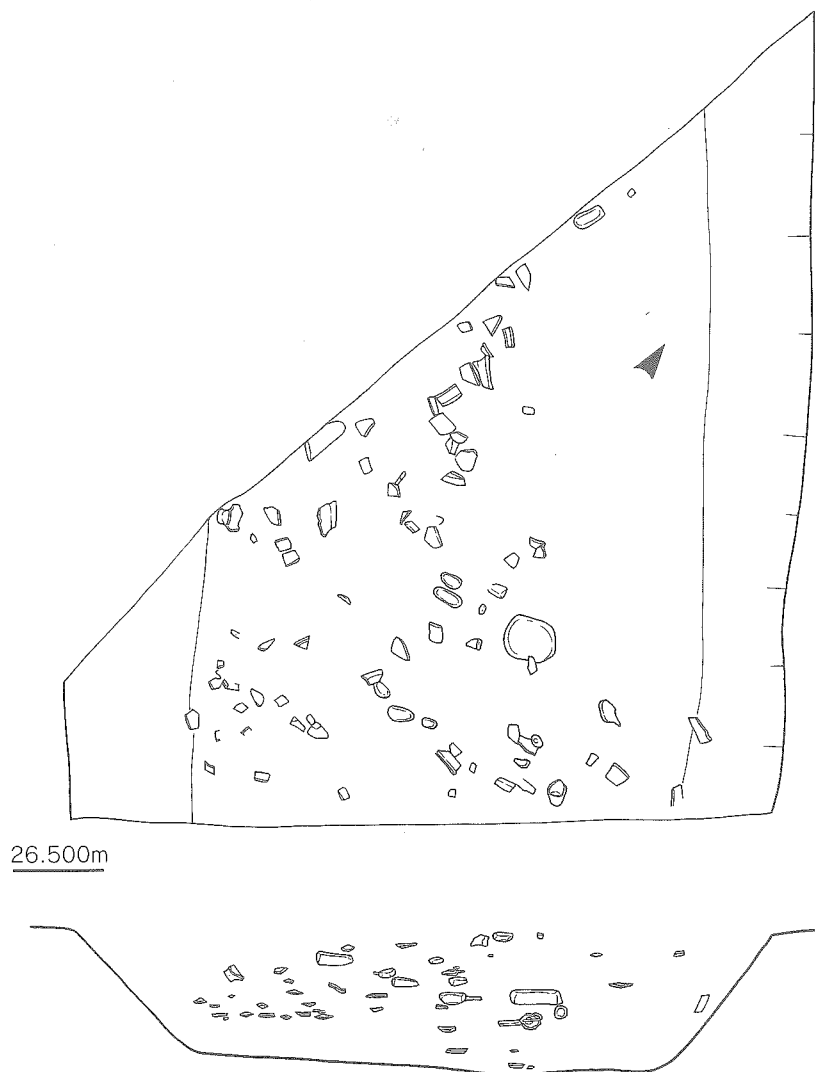
(6) 遺構、出土遺物

SD1

SD1 は 1 トレンチの中央やや南よりで検出された。幅は約 2.8 m、深さ約 55cm、断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色の弱粘質土であった。流れ込みの遺物が数十点検出された。115～134 は弥生土器の甕である。115～119 は口縁部先端に突帯がめぐるものである。115、116 は短く屈曲する。117 は突帯部に刻み目を施す。胴部に一条の沈線をめぐらす。118 の突帯部断面は三角を呈する。突帯部先端に刻み目を施す。119 の外面は摩滅が著しく、突帯部に僅かに刻み目がのこる。120～124 は口縁部を「く」字に屈曲する甕である。120、121 の端部は僅かに肥厚する。122 は短く屈曲する。外面に粗いハケメ調整。色調は褐色、焼成は良好。123 は復元口径 27.6cm を測る。内外面とも摩滅が著しく調整は不明。焼成は良好。124 の口縁端部は肥厚する。125～128 は口縁部「く」字に屈曲し、口縁直下に三角の突帯をめぐらす甕である。126 の口縁部は僅かに内側に湾曲する。127 は復元口径 22.4cm を測る。口縁部内側はハケメ調整。色調は淡褐色で、焼成は良好。128 は復元口径 33cm を測る。内外面とも摩滅が著しく、外面に僅かにハケメがのこる。129～134 は甕の底部になる。129 は底径 7.8cm を測る。外面はハケメ調整。色調は淡褐色で、焼成は良好。130 は底径 7.2cm を測る。摩滅が著しく調整は不明。131 は底径 7.4cm を測る。外面はハケメ調整。色調は褐色で、焼成は良好。132 は底径 8.2cm を測る。色調は暗褐色。133 は底径 6.2cm を測る。内外面とも摩滅が著しく、外面に僅かにハケメがのこる。134 は底径 6.8cm を測る。外面に縦方向のケズリ後ハケメ調整。135～137 は壺のなると思われる。135 は上外方に短くのびる口縁部。内面はミガキ調整。136 は底部である。復元底径 7.6cm をはかる。色調は暗褐色、焼成はやや不良である。137 は胴部になる。貝殻による山形紋が施される。



23 図 平成 8 年度調査区図 (S = 1/200)



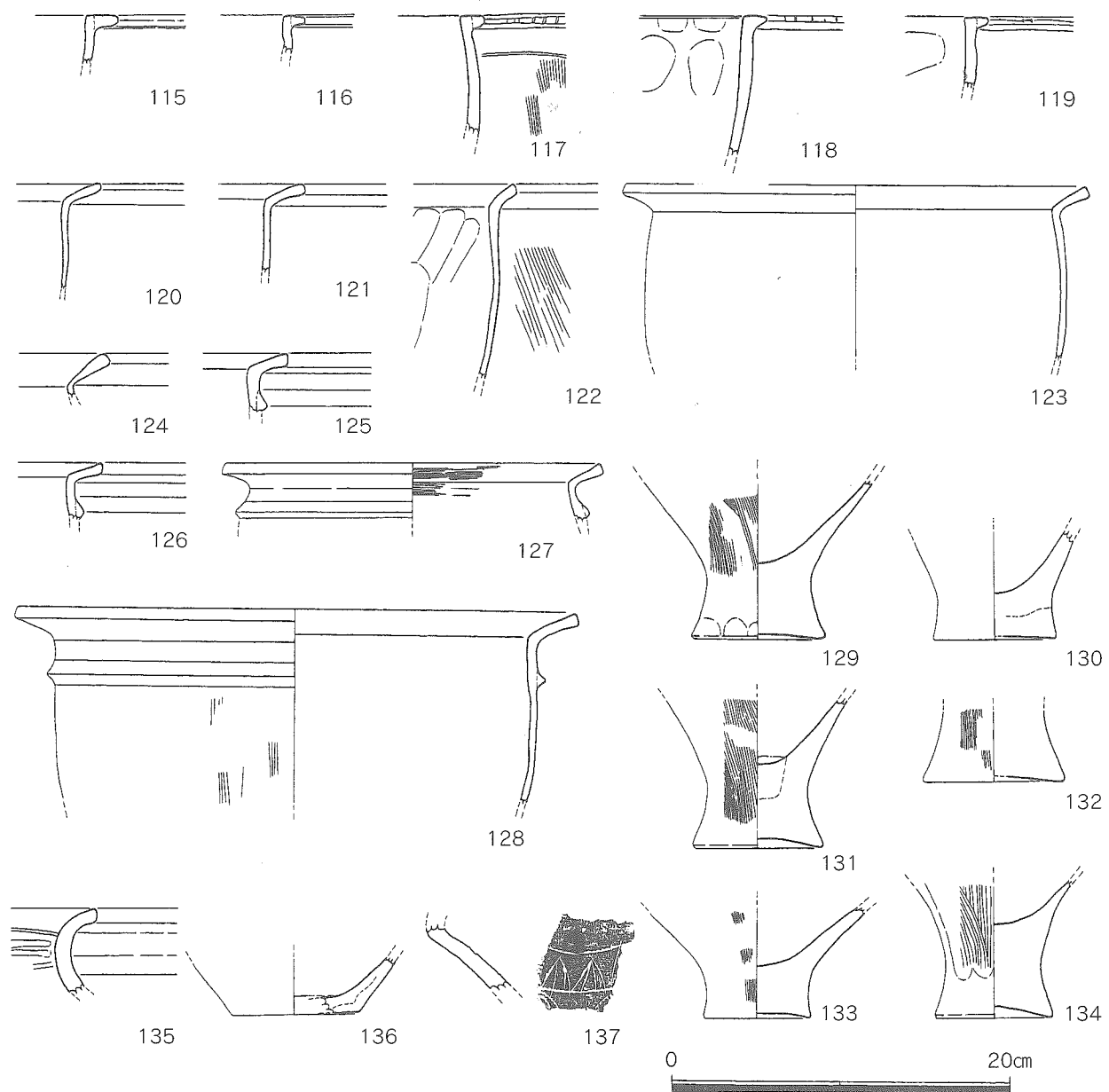
24 図 SD-1 実測図 (S = 1/30)

SD 2

SD 2 は 1 トレンチの中央部で検出された。SD 1 を切る。出土遺物はなく時期、性格は不明である。埋土は褐色土であった。

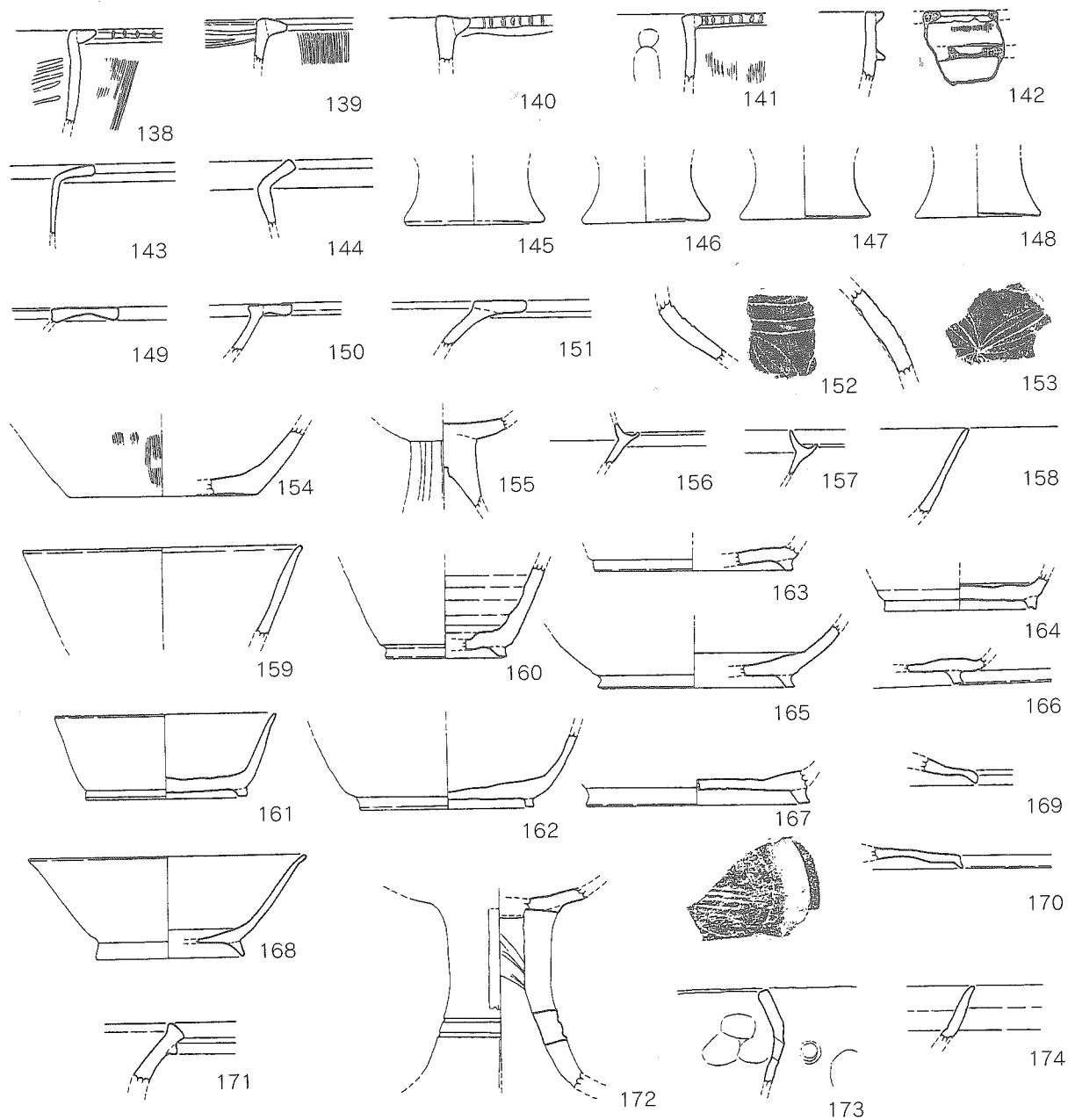
その他の遺物

遺構検出面まで手掘りでおこない遺物が検出された。26 図はそれらの遺物である。138 ~ 142 は口縁端部が短く屈曲する弥生土器である。138 は口縁端部に刻み目を施す。外面はハケメ調整、内面はミガキ調整。139 も外面はハケメ調整、内面はミガキ調整。140 の口縁端部は三角形で刻み目を施す。141 の口縁端部は丸く、刻み目を施す。142 の口縁端部は三角形で、胴部に同様の突帯を一条めぐらす。口縁直下外面はハケメ調整。143、144 は口縁部を「く」字に屈曲する弥生土器の甕である。143 の口縁端部は肥厚する。145 ~ 148 は弥生土器の甕の底部である。145 は復元底径 8.2cm を測る。色調は淡褐色、焼成は良好。146 は復元底径 7.6cm を測る。147 は復元底径 7.7cm を測る。148 は復元底径



25 図 SD-1 出土遺物図 (S = 1/4)

7.6cmを測る。色調は淡橙褐色、焼成は良好。149～151は弥生土器の壺か高坏の口縁部になる。断面鋤先状を呈する。150の口縁直下は外方に湾曲ぎみ。高坏か。151は内方に湾曲ぎみ。壺か。152、153は壺の胴部か。貝殻で木の葉紋を施す。154は壺か甕の底部である。復元底径11.4cmを測る。外面はハケメ調整。155は高坏の脚部になる。縦方向のミガキ調整。色調は赤褐色で、焼成は良好。156～167は須恵器の坏身になる。156、157の受部はやや内湾する。158の口縁端部は上外方にのび尖りぎみ。159は復元口径12.8cmを測る。口縁端部は上外方へのび、やや外反ぎみ。160は復元底径5.4cmを測る。内外面は回転ナデ調整。161は口径10cm、器高3.8cm、底径7.3cmを測る。口縁端部はやや外反ぎみ。162は底径7.8cmを測る。底部はヘラ切り後ナデ調整。163は復元底径8.8cmを測る。色調は灰褐色で、焼成は良好。164は底径6.8cmを測る。高台は底部外縁につく。165は復元底径8.8



26 図 平成 8 年度出土遺物図、弥生土器 (S = 1/4) 土師器、須恵器 (S = 1/3)

cm を測る。高台は底部外縁よりやや内側につく。166 の高台は底部外縁より内側につく。167 は復元底径 9cm を測る。168 は土師器の坏身になる。復元口径 12.6cm、器高 4.6cm、復元底径 6.7cm を測る。口縁部は上外方へのび、端部は外反し丸みをもつ。色調は淡赤褐色、焼成は良好。169、170 は坏蓋である。169 の口縁端部は丸みをもつ。170 の口縁端部は外反しやや尖りぎみ。171 は須恵器の甕の口縁部。端部は肥厚し口縁直下に三角の突帯をめぐらす。172 は須恵器の高坏脚部である。2ヶ所の透かし孔が開けられ、2ヶ所の透かし孔の間に二本の沈線をめぐらす。173 は土師質のタコ壺である。内外面に指押さえ痕がのこる。胴部に円孔を穿つ。色調は褐色で焼成は良好。174 は青磁の椀か。胎土は精良である。

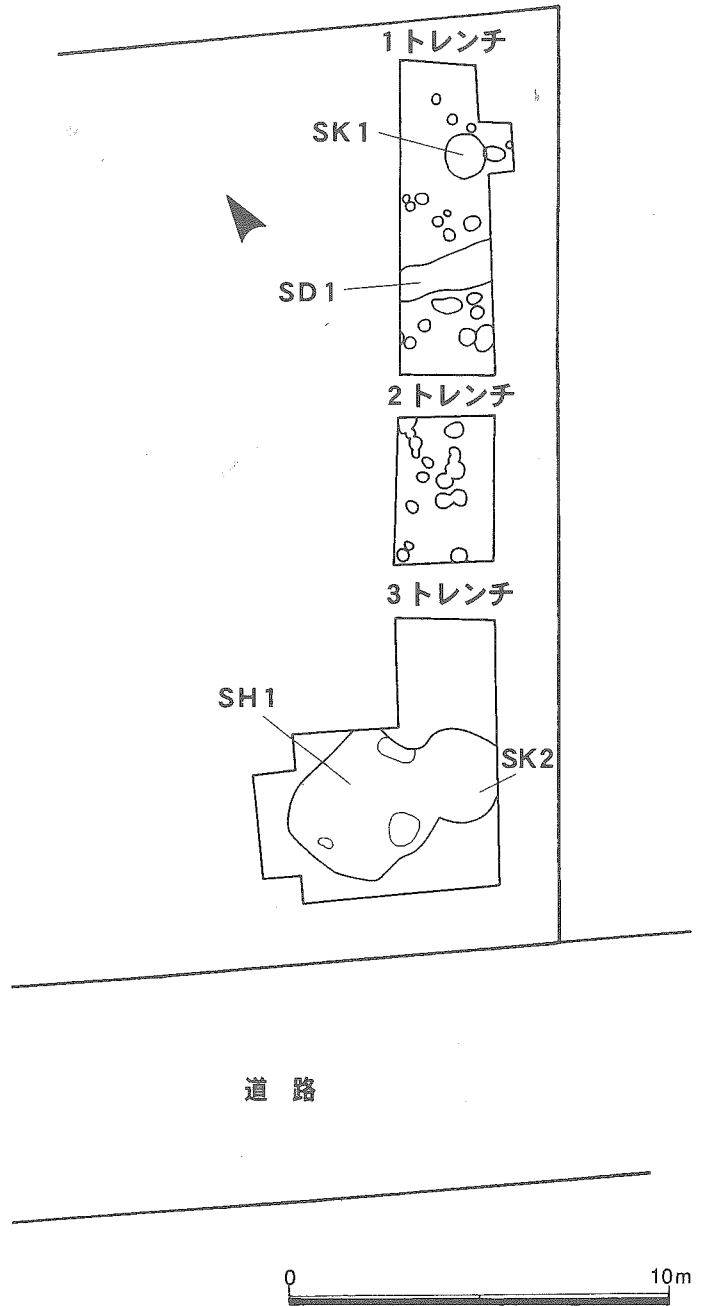
(7) 平成9年度調査

平成9年度の調査区は平成8年度調査区の北西にあたる畑地で行った。平成8年度に検出した溝の続きを確認することを調査の目的とした。調査区に3本のトレンチを設定し人力で掘削し、遺構検出をおこなった。1トレンチで検出された遺構は土坑1基(SK1)、溝状遺構一条(SD1)、ピット19基である。2トレンチで検出された遺構はピット16基である。3トレンチで検出された遺構は土坑1基(SK2)、竪穴住居1基(SH1)である。

(8) 遺構、出土遺物

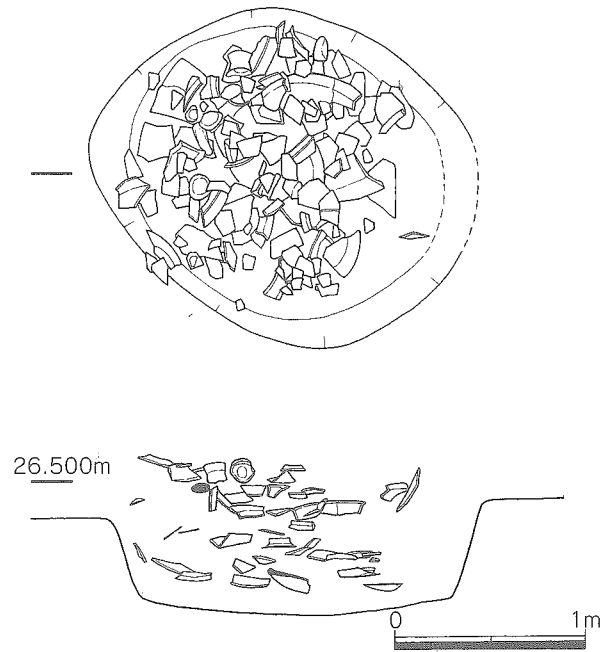
SK1

SK1は1トレンチの中央部やや北西よりで検出された。遺構ライン検出面より約20cm上層で弥生土器が粉碎された状態で検出された。土坑はこの高さから掘り込まれたものであろう。検出できた形状は円形で直径約1m、深さ約20cmを測る。土器は出土状況から一括廃棄されたものであろう。175～208は弥生土器の甕になる。175は復元口径24.8cmを測る。内外面はハケメ調整。色調は淡褐色、焼成は良好。176～191までは口縁部を「く」字に屈曲させる。176の端部はやや肥厚する。177の外表面はハケメ調整。178の外表面はハケメ調整、内表面は削り。179も外表面ハケメ調整。180の口縁端部はやや肥厚する。181の口縁端部は肥厚し丸みをもつ。182の口縁端部はやや肥厚し、上方へ僅かにのびる。183の口縁部は僅かに内側に湾曲し、端部は肥厚する。外面はハケメ調整。184、185の端部は上方へのびる。186の口縁端部は肥厚し、丸みをもつ。187の口縁端部は尖りぎみ。188の口縁部は内側に湾曲し端部は上方へのびる。189、190の口縁端部は上方へのび、胴部外面はハケメ調整。191の端部は肥厚ぎみ。192は復元口径24.4cmを測る。端部は肥厚する。193は復元口径24cmを測る。192と同一個体か。194は復元口径25.3cmを測る。口縁端部は上方に跳ね上げる。胴部外面にハケメ調整。195は復元口径29.4cmを測る。外面はハケメ調整。色調は淡褐色、焼成は良好。196は復元口径25cmを測る。外面はハケメ調整。197は復元口径24.8cmを測る。口縁端部は肥厚し丸みをもつ。198は復

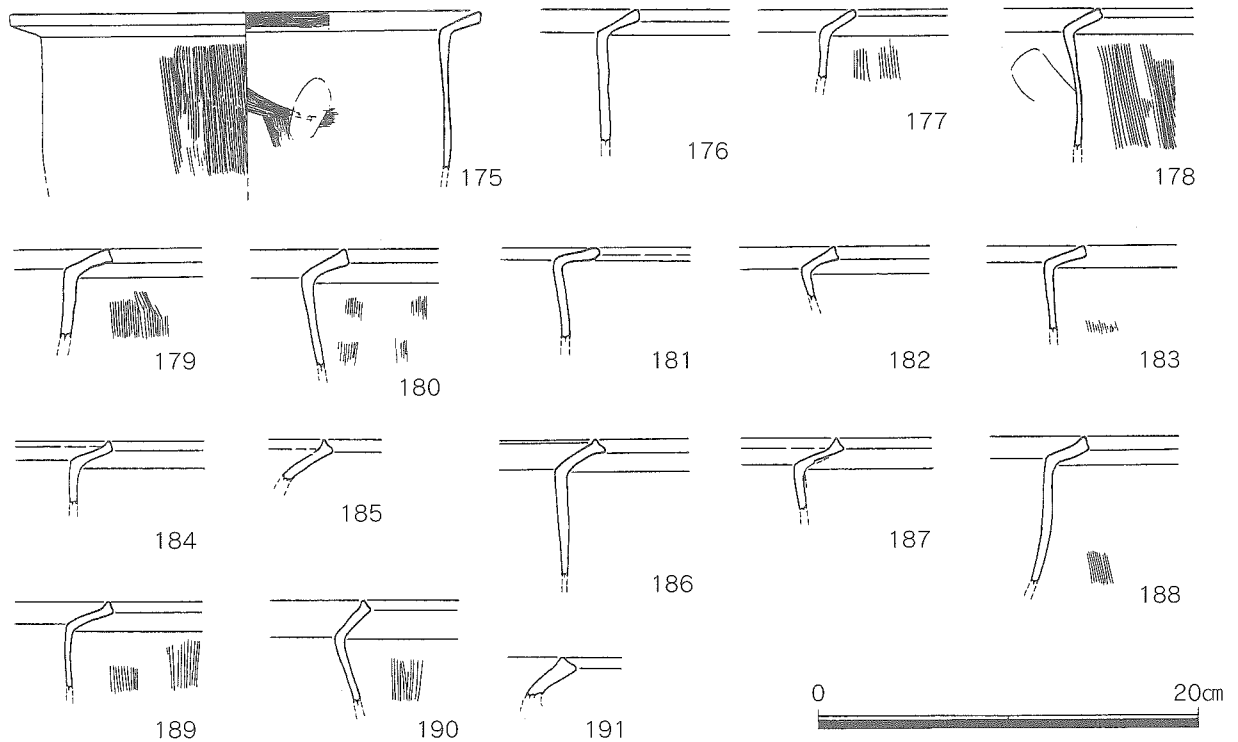


27 図 平成9年度調査区図 (S = 1/200)

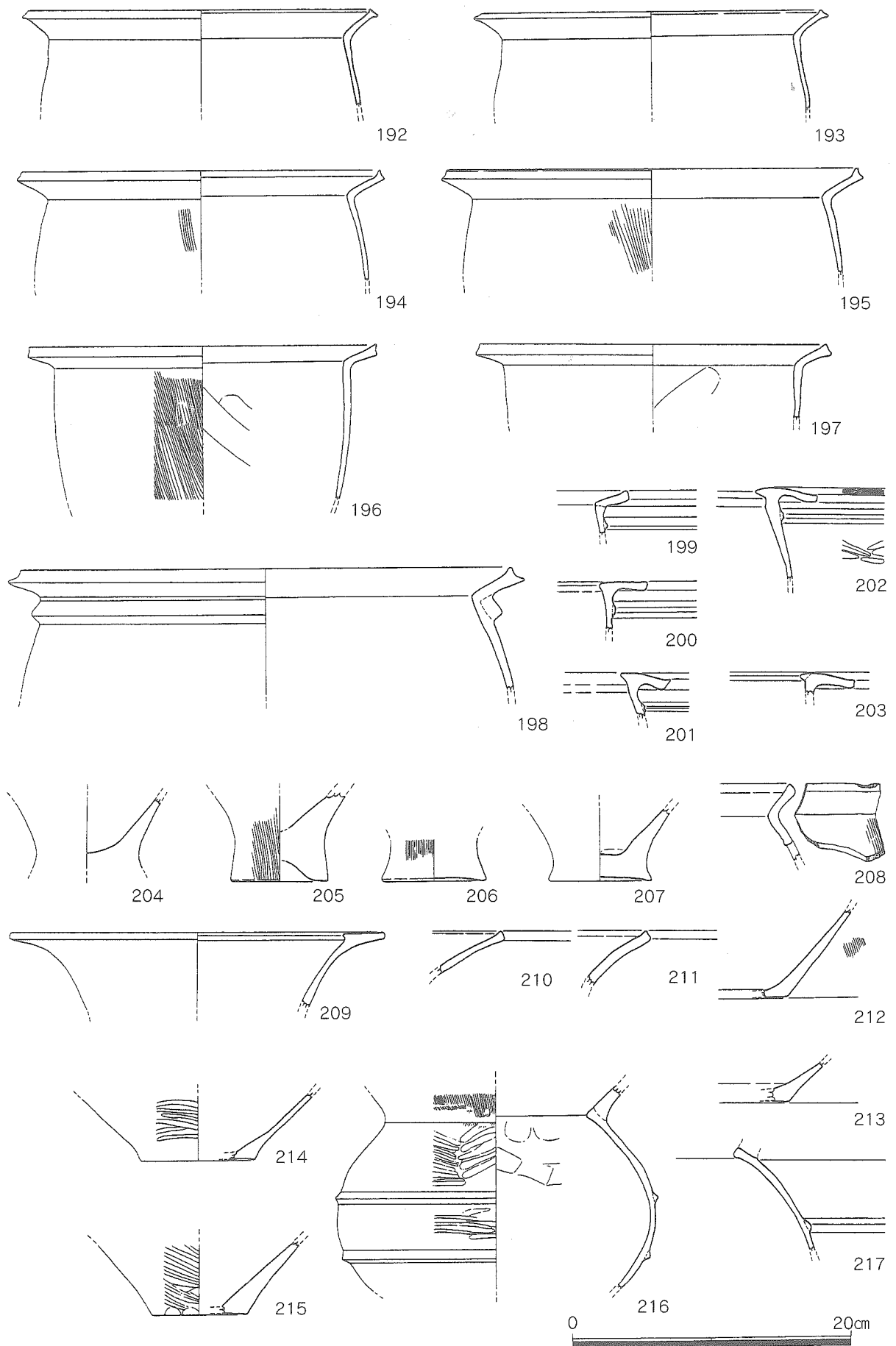
元口径 35.2cm を測る。屈曲部に一条の突帯をめぐらす。口縁端部は上方へのびる。199 は胴部に 1 条の突帯をめぐらす。口縁端部は僅かに上方へのび丸みをもつ。200 の口縁部は「L」字に屈曲し鋤先状を呈する。胴部に断面台形の突帯を一条めぐらす。201、202 の口縁部は鋤先状で端部は下方へ垂下する。胴部に断面「M」字の突帯をめぐらす。202 は口縁部と外面にミガキ調整。203 も口縁部は鋤先状を呈する。204 ~ 207 は甕の底部である。204 は淡褐色で焼成は良好。205 は復元底径 7cm を測る。外面はハケメ調整。上げ底。206 は復元底径 7.2cm を測る。外面はハケメ調整。207 は底径 7.2cm を測る。内外面ともナデ調整。208 は口縁部を「く」字に屈曲する甕である。胴部に透かし孔を有する。胴部外面はハケメ調整。209 は壺の口縁部。復元口径 27.2cm を測る。口縁部は鋤先状を呈する。210、211 は壺か蓋の口縁部。210 の端部は丸みをもつ。212 ~ 215 は壺の底部。212 は外面ハケメ調整。213 は調整不明。214 は復元底径 8.2cm を測る。外面は横方向のミガキ調整。215 は復元底径 6.8cm を測る。外面はミガキ調整。216 は胴部がふ



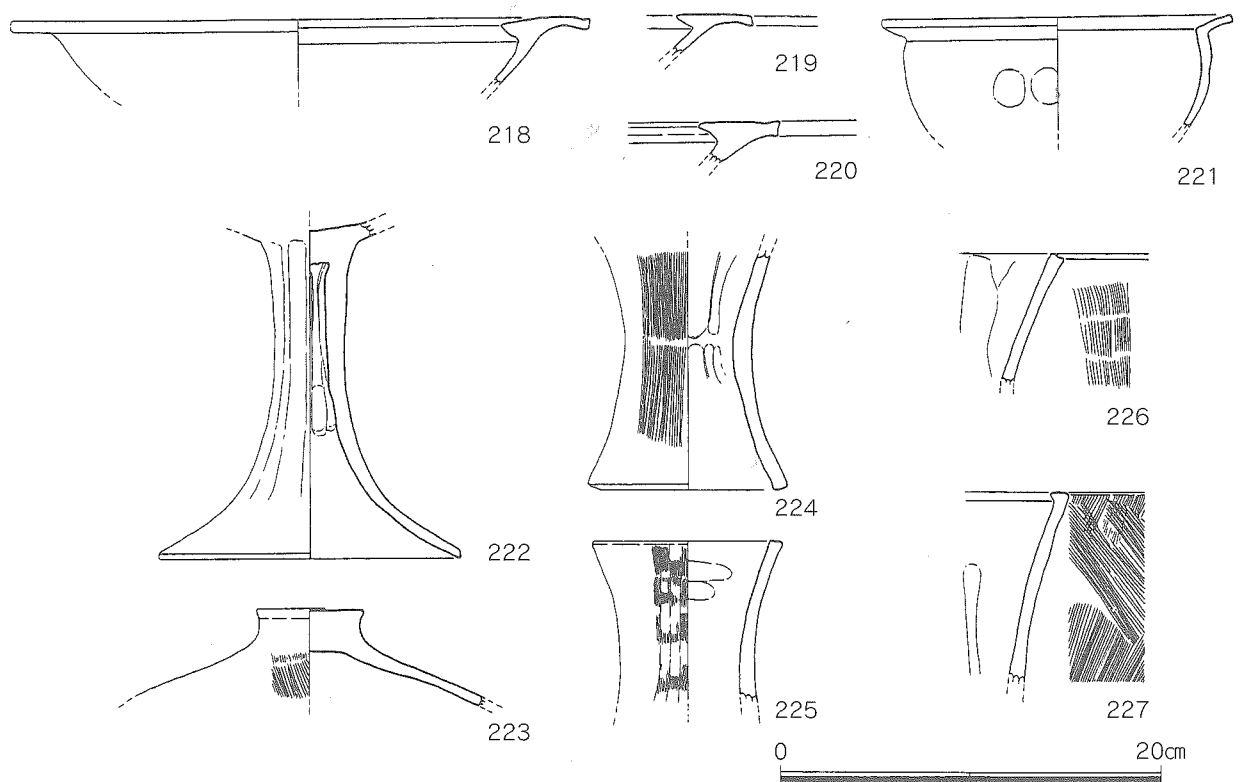
28 図 SK-1 実測図 (S = 1/40)



29 図 SK-1 出土遺物図 (S = 1/4)



30 图 SK-1 出土遺物图 (S = 1/4)



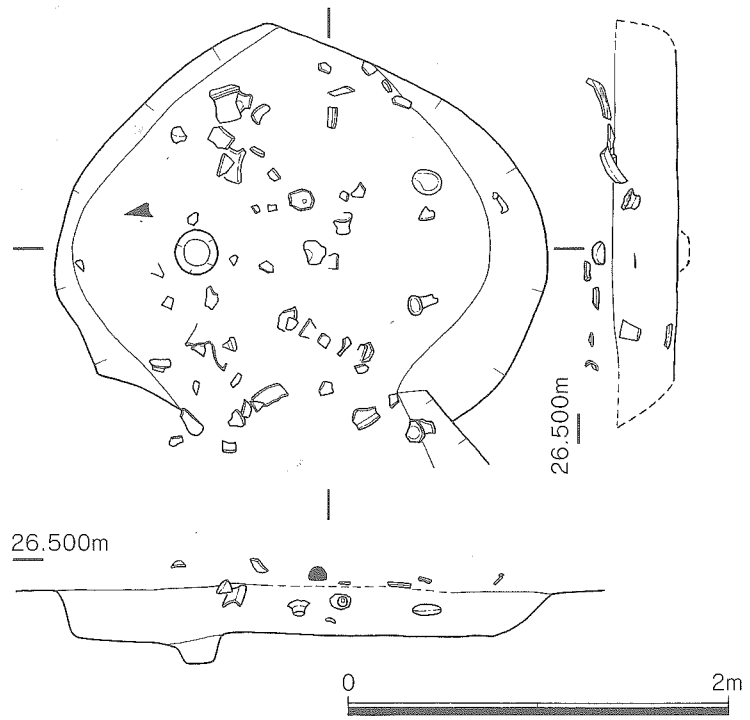
31 図 SK-1 出土遺物図 (S = 1/4)

くらむ壺である。胴部に二条の三角突帯をめぐらし、ミガキ調整。217は壺の胴部。二条の断面三角の突帯をめぐらす。218は高坏の口縁部である。復元口径30.6cmを測る。口縁部断面は鋤先状。色調は淡褐色で僅かに丹塗り痕がのこる。219、220は高坏か壺の口縁部。口縁部断面は鋤先状。221は高坏か。復元口径18.4cmを測る。色調は淡褐色、焼成は良好。222は高坏の脚部になる。復元底径15.8cmを測る。外面は縦方向のケズリ調整。色調は赤褐色で、丹塗り痕がみられる。223は蓋になる。外面はハケメ調整。224～227は器台になる。224は底径10.4cmを測る。外面はハケメ調整。225は復元口径10cmを測る。外面にハケメ調整後、縦方向のナデ調整。226、227の外面はハケメ調整。227の口縁端部は内側に短く屈曲する。

SK2

SK2は3トレンチの東側で検出された。土坑は隅丸方形にちかい形状になろう。最大幅約2.6m、深さ約25cmを測る。一部、堅穴住居とかさなっており全景は不明で、住居跡と土坑の切りあいは確認できなかった。土坑の底からピットが1基検出されたが、この土坑に伴うものか不明である。228～233は弥生土器の甕である。228は復元口径22.4cmを測る。口縁端部は上外方へ跳ね上げる。外面はハケメ調整。229は復元口径23.6cmを測る。口縁端部は肥厚し上方へのびる。色調は淡赤褐色、焼成は良好である。230の口縁部は「く」字に屈曲し上方へ短くのびる。231は口縁部を「L」字に屈曲し断面は鋤先状を呈する。胴部に断面「M」字の突帯がめぐる。232、233は底部である。232は底径6.5cmを測る。外面はハケメ調整。233は底径6.3cmを測る。上げ底で外面はハケメ調整。234は高坏の口

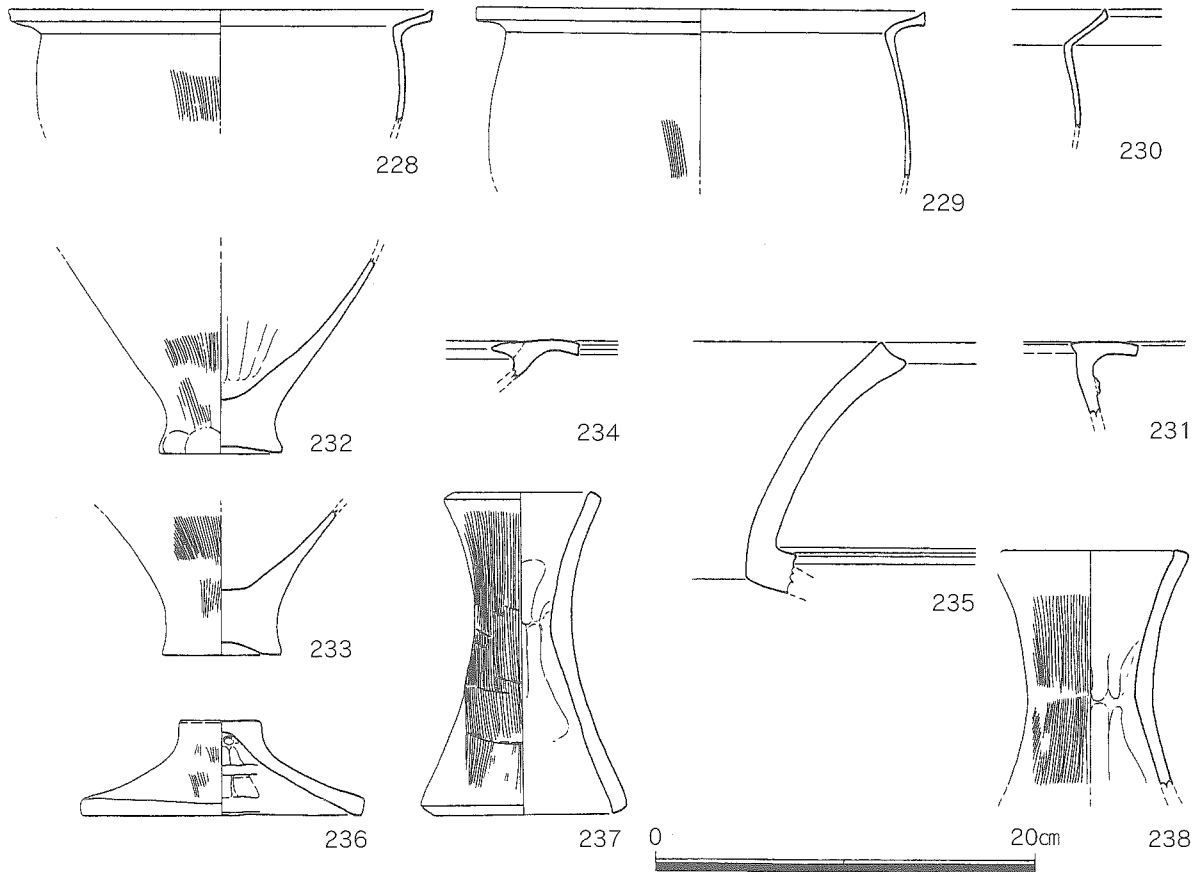
縁部か。断面は鋤先状。235は壺の口縁部。朝顔型にひらき端部は僅かに肥厚する。屈曲部に断面三角の突帯をめぐらす。色調は淡褐色、焼成は良好。236は蓋になる。復元口径14.8cm、器高5cmを測る。外面はハケメ調整。237、238は器台である。237は口径7.2cm、底径10.8cm、器高17cmを測る。外面はハケメ調整。238は口径10.4cmを測る。口縁端部を内側に短く屈曲させる。外面はハケメ調整。



32図 SK-2実測図 (S = 1/40)

SH1

SH1は3トレンチの南側で検出された。全景は不明であるが形状は隅丸方形であろう。北西-南東に約3.4m、北東-南東に約3.6m、深さ

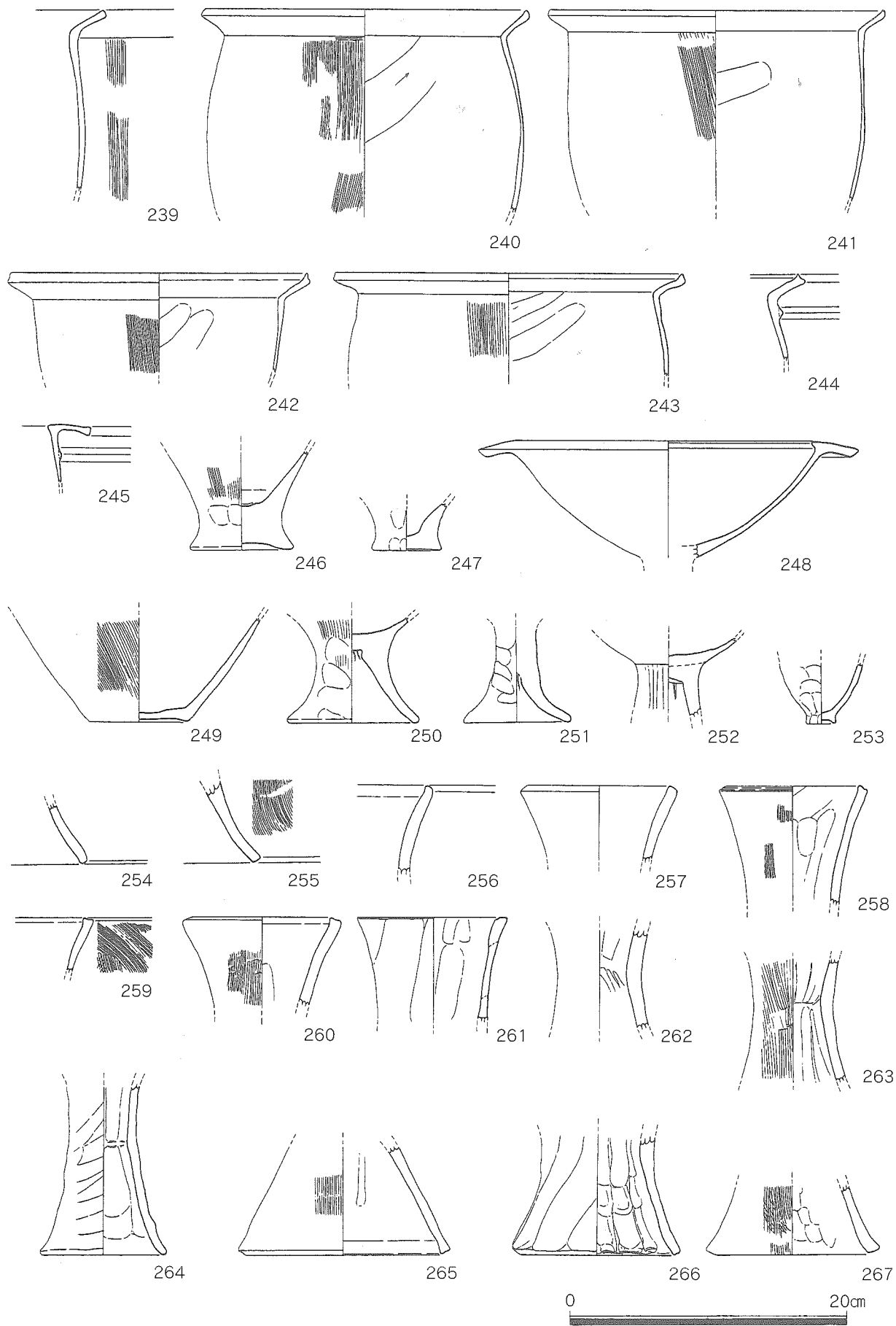


33図 SK-2出土遺物図 (S = 1/4)

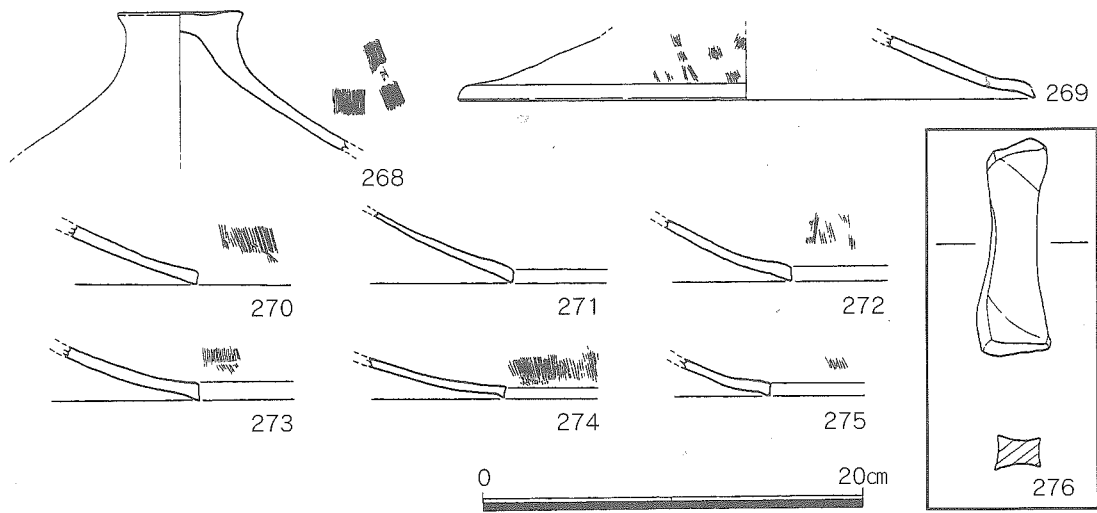
約 30cm を測る。床面で 3 基にピットが検出された。住居の主柱穴であろう。焼土塊が住居内の南西より床面で検出され、炉跡と推測される。また住居全体から炭が検出された。住居は焼失したものか。239 ~ 247 は弥生土器の甕になる。239 は「く」字に屈曲する。外面はハケメ調整。240 は復元口径 23.4cm を測る。口縁部は僅かに内側に湾曲し短く上方へのびる。外面はハケメ調整。241 は復元口径 24cm を測る。外面はハケメ調整。242 は復元口径 21.6cm を測る。口縁端部は上方へ跳ね上げる。外面はハケメ調整。243 は復元口径 25cm を測る。口縁端部は上方へ短く跳ね上げる。外面はハケメ調整。244 は口縁端部を短く跳ね上げ胴部に断面三角の突帯をめぐらす。245 は口縁部を「L」字に屈曲する。端部は下方に垂下する。胴部に断面三角の突帯をめぐらす。246 は底径 7.2cm を測る。外面はハケメ調整。247 は底径 4.8cm を測る。小型のもの。248 は高坏である。復元口径 20.6cm を測る。口縁部は鋤先状を呈し、端部は下方へ垂下する。外面に丹塗り痕がみられる。249 は壺の底部か。底径 7.2cm を測る。外面はハケメ調整。250 は小型の高坏か。底径 9.2cm を測る。251、252 は高坏の脚部である。251 は底径 7.7cm を測る。色調は赤褐色、焼成はやや不良。252 の脚部外面は縦方向のミガキ調整。丹



34 図 SH-1 実測図 (S = 1/40)



35 图 SH-1 出土遺物图 (S = 1/4)

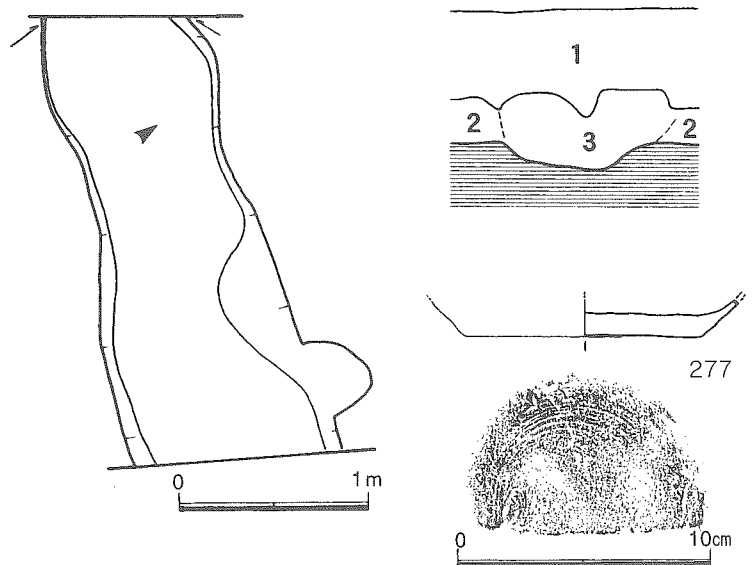


36 図 SH-1 出土遺物図 土器 (S = 1/4) 石器 (S = 1/2)

塗り痕がみられる。253 はミニチュア土器。底径 2cm を測る。254 ~ 267 は器台になる。254 の端部は僅かに内湾する。255 は外面ハケメ調整。256 は僅かに内湾する。257 は復元口径 10cm を測る。258 は復元口径 9.6cm を測る。外面はハケメ調整。259 は口縁端部を内側につまむ。外面はハケメ調整。260 は復元底径 10cm を測る。外面はハケメ調整。261 は復元口径 10.8cm を測る。粗雑な作りである。内外面ともケズリ調整。263 は外面ハケメ調整。内面はケズリ調整。264 は底径 9cm を測る。内外面ともケズリ調整。265 は復元底径 14.2cm を測る。外面はハケメ調整。266 は復元底径 11.2cm を測る。内外面ともケズリ調整。267 は復元底径 10.8cm を測る。外面はハケメ調整。268 ~ 275 は蓋になる。268 は外面ハケメ調整。上部径は 6.6cm を測る。269 は復元口径 30.4cm を測る。外面はハケメ調整。外面に丹塗り痕か。270 は外面ハケメ調整。271 の口縁端部は肥厚する。272 ~ 275 は外面ハケメ調整。276 は砥石。最大長 5.8cm、最大幅 1.9cm を測る。

SD1

SD1 は 1 トレンチの中央部で検出された。トレンチを東西方向へ横切る。溝の幅は約 1m、深さ約 15cm を測る。黒褐色 (3) の埋土である。溝からの出土遺物はないが、検出面直上で土師器の坏が検出された。277 は復元底径 9.1cm を測る。底部に糸切りを施す。



37 図 SD-1 実測図、出土遺物図

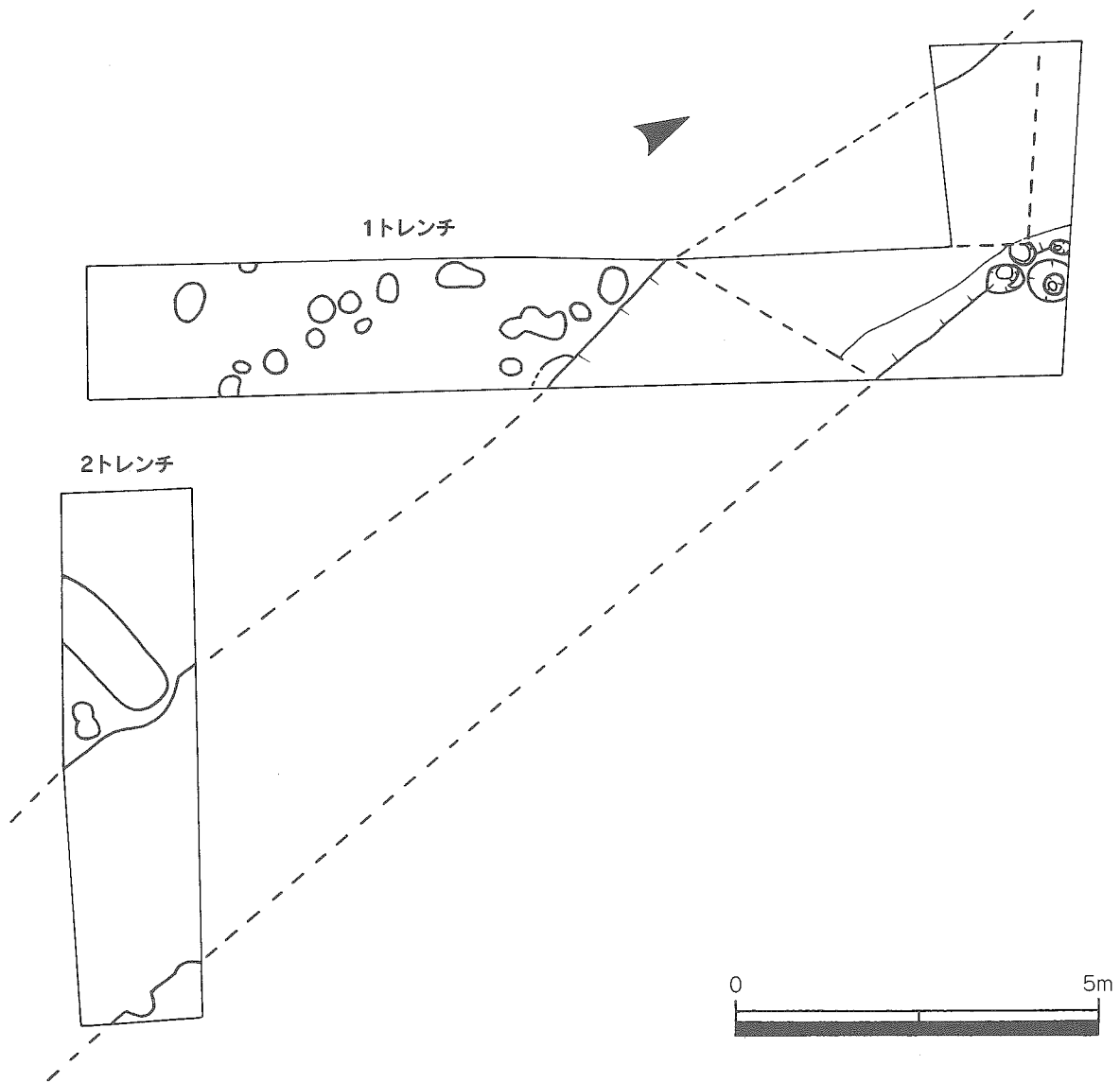
(9) 平成 10 年度調査

平成 9 年度に溝の続きが検出されなかったことから、平成 8 年度調査区に近づき溝の続きの確認に努めた。1 トレンチで検出された遺構は溝状遺構 1 条 (SD1)、ピット 21 基である。2 トレンチで検出した遺構は溝状遺構 1 条 (SD1)、土坑 1 基 (SK1)、ピット 2 基である。1 トレンチの溝状遺構を一部掘り下げ遺物を取り上げた。

(10) 遺構、出土遺物

SD1

1 トレンチで溝状遺構を検出した。幅は約 3m、深さ約 60cm を測る。埋土は上層が暗褐色土層、下層が黄褐色を含む黒色土で弱粘質である。278 ~ 318 は弥生土器の甕である。278 は口縁部を短く屈曲する如意状のものである。279 の口縁端部は三角形を呈する。280 の口縁部は短く屈曲し、端部は方形を呈する。281 は屈曲部に明瞭な角がなく、ゆるやかに屈曲する。282 の口縁端部は僅かに肥厚する。

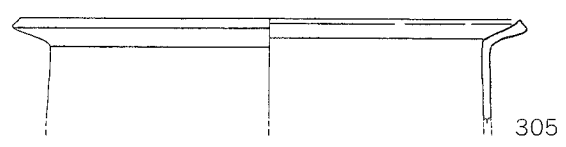
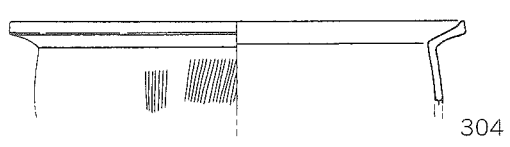
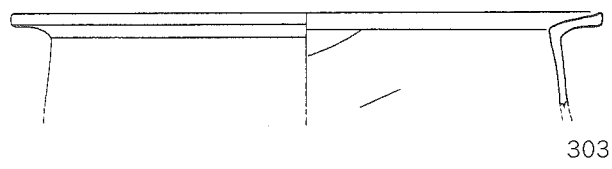
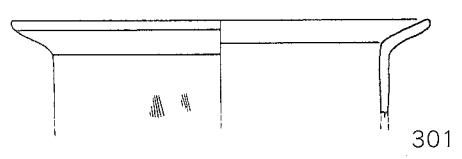
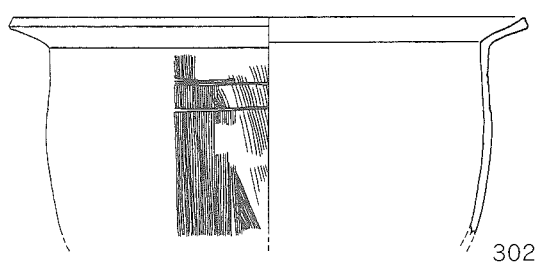
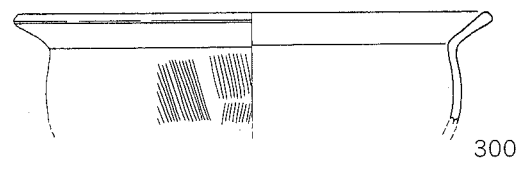
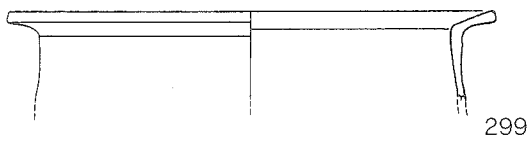
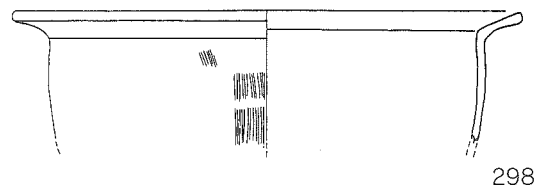
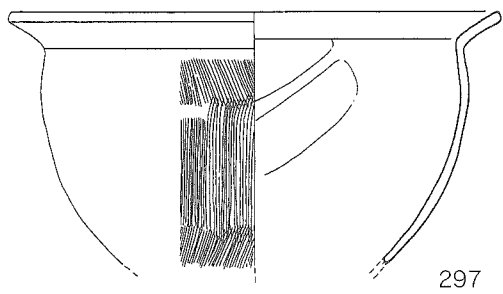
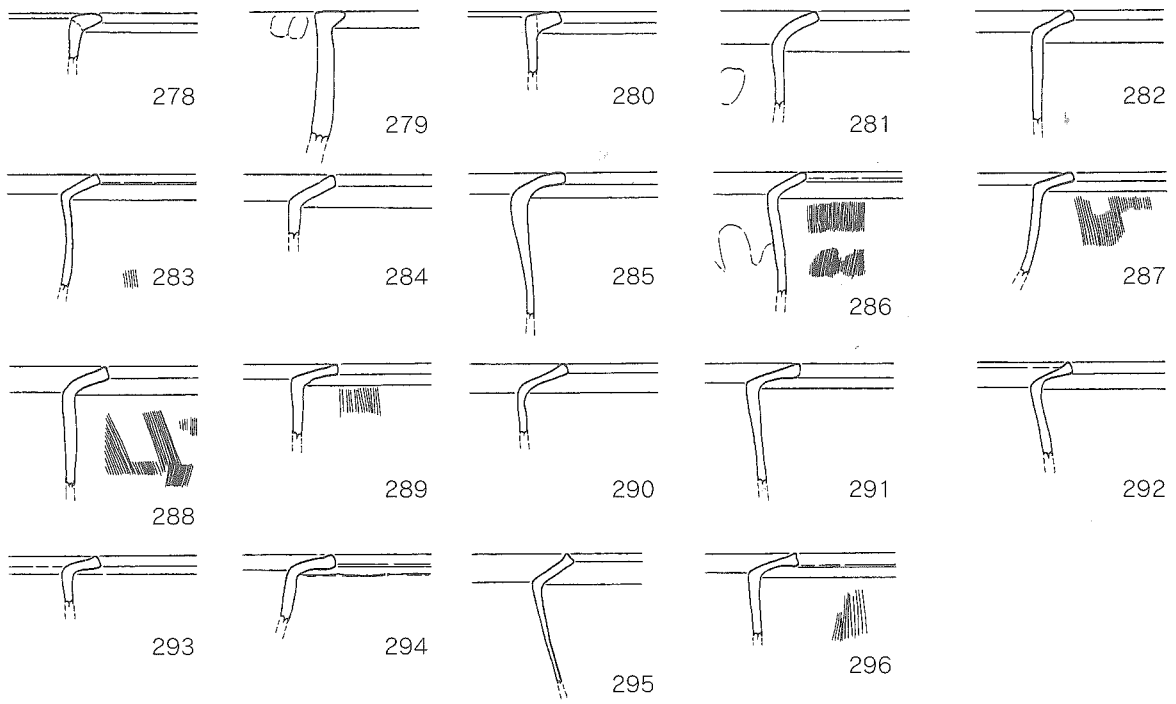


38 図 平成 10 年度調査区図 (S = 1/100)

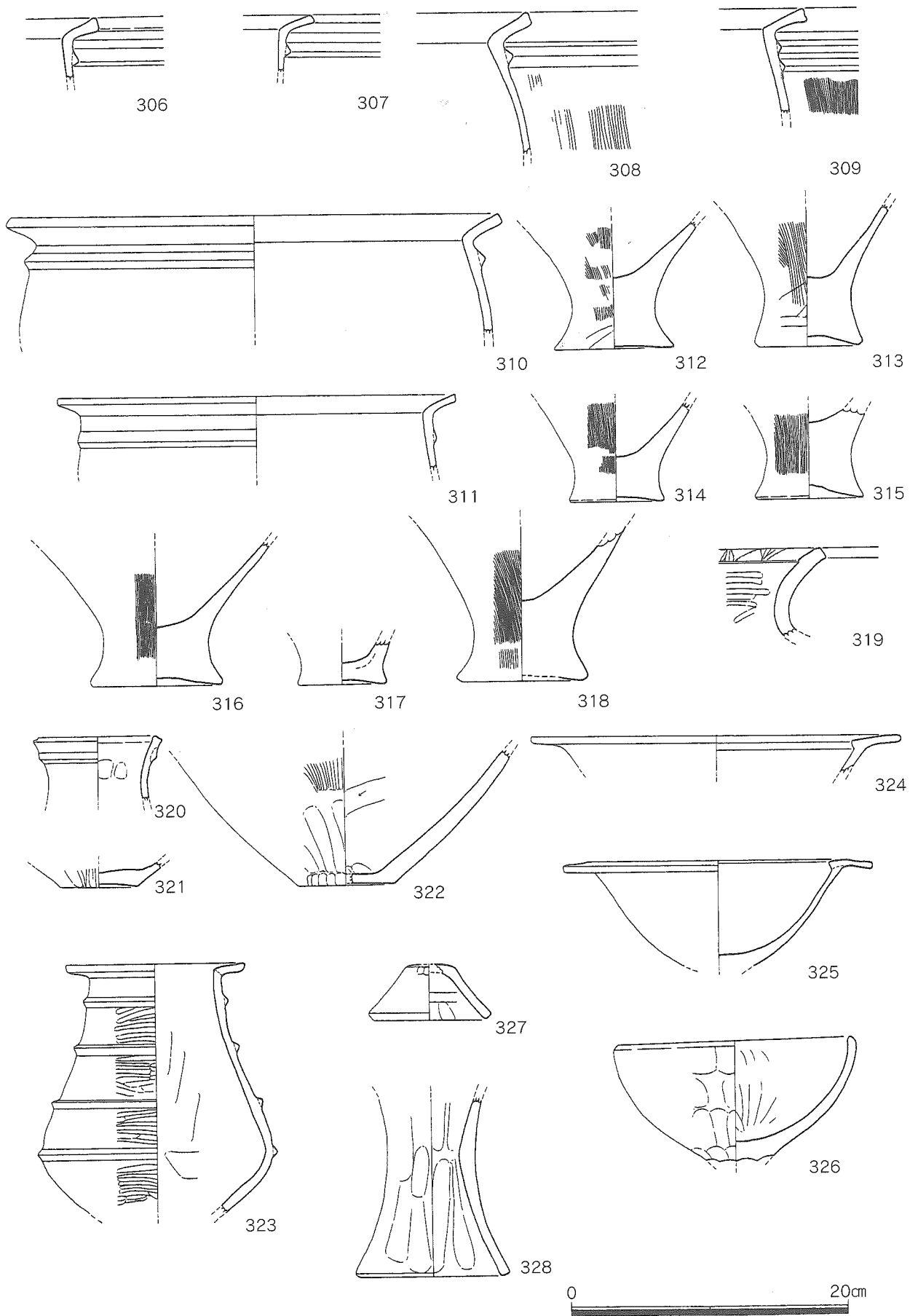


39 図 SD-1 実測図 (S = 1/40)

283 の外面はハケメ調整・284 の口縁部は内側に湾曲ぎみ。285 の口縁部は下方に僅かに湾曲する。286 の端部は丸みをもつ。外面はハケメ調整。287、288、289 も外面ハケメ調整。290 の口縁部は内側に湾曲ぎみ。291 の口縁端部は肥厚する。292 の口縁端部は上方へ短くのびる。293 の口縁部は短く屈曲する。294 の口縁端部は僅かに肥厚する。295 の口縁端部は短く上方へのびる。296 の口縁端部は肥厚する。外面はハケメ調整。297 は復元口径 25.8cm を測る。外面はハケメ調整で丹塗り痕がみられる。298 は復元口径 26.6cm を測る。外面はハケメ調整。299 は復元口径 25.6cm を測る。内外面とも調整は不明。色調は淡褐色、焼成は良好。300 は復元口径 24.2cm を測る。口縁端部は肥厚する。外面はハケメ調整。301 は復元口径 22cm を測る。口縁端部は上外方へのびる。302 は復元口径 27cm を測る。胴部に 3 本の沈線をめぐらす。303 は復元口径 31cm を測る。口縁部は「L」字に屈曲する。口縁端部は僅かに上方へのびる。304 は復元口径 24cm を測る。口縁端部は上方へ跳ね上げる。外面は



40 图 SD-1 出土遺物图 (S = 1/4)

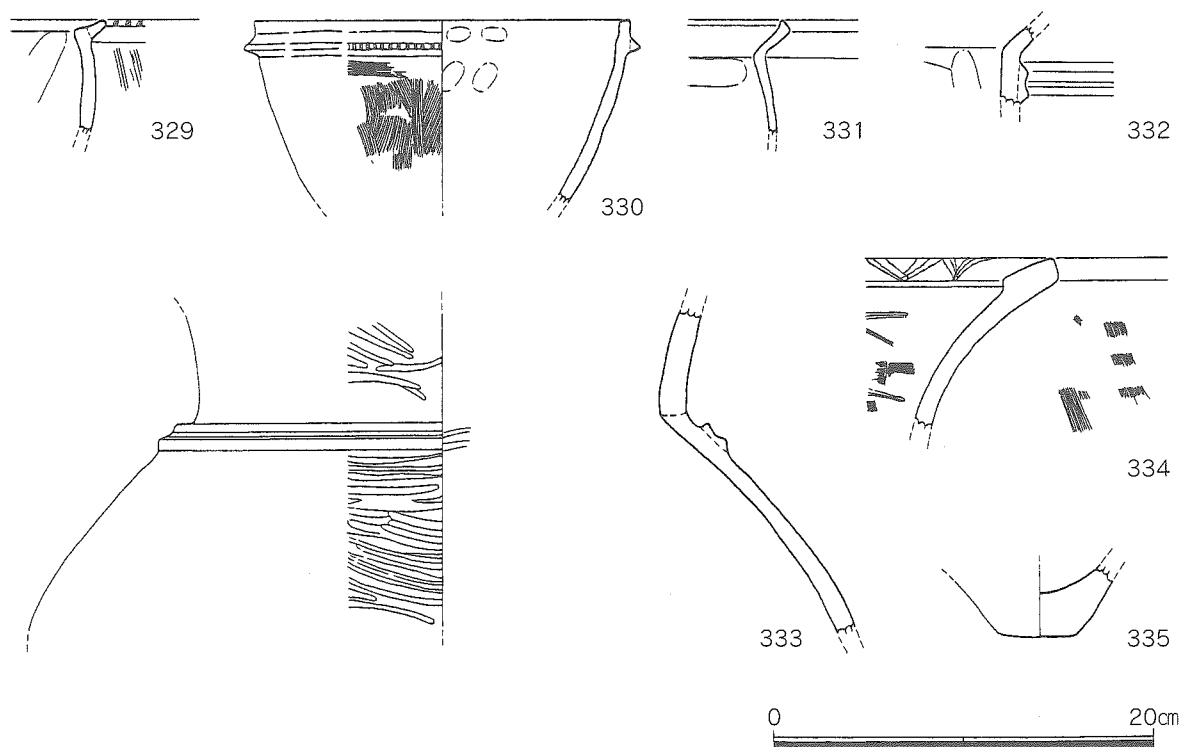


41 图 SD-1 出土遺物图 (S = 1/4)

ハケメ調整。305は復元口径26.4cmを測る。口縁端部は上方へ短く跳ね上げる。内外面とも調整は不明。306～308は胴部に1条の三角突帯をめぐらすものである。306の端部は肥厚する。308の外表面はハケメ調整。309は胴部に2条の三角突帯をめぐらすものである。口縁端部は肥厚する。310は復元口径35.2cmを測る。311は復元口径28.8cmを測る。胴部に断面三角形の突帯を1条めぐらす。色調は淡褐色、焼成は良好。312～318は底部である。312は底径8.9cmを測る。外表面はハケメ調整。平底。313は底径7.9cmを測る。外表面はハケメ調整。上げ底。314は底径6.5cmを測る。315は底径7.8cmを測る。上げ底。316は底径9.4cmを測る。外表面はハケメ調整で丹塗り痕がみられる。317は底径6.8cmを測る。外表面はナデ調整。318は復元底径8.6cmを測る。外表面はハケメ調整。319～323は弥生土器の壺になる。319の口縁端部は肥厚し方形を呈する。貝殻による鋸歯紋を施す。頸部内面にミガキ調整。320は長頸壺。復元口径8.4cmを測る。口縁直下に断面三角形の突帯をめぐらす。321、322は底部である。321は底径5.6cmを測る。外表面に縦方向のミガキ調整。322は復元底径7cmを測る。外表面に縦方向のミガキ調整。323は復元口径13cmを測る。胴部に下方に向かい張り出し、4条の断面三角形の突帯をめぐらす。胴部はミガキ調整。324～326は高坏である。324、325の口縁部断面は鋤先状を呈する。324は復元口径26.8cmを測る。色調は淡褐色、焼成は良好である。325は復元口径16cmを測る。内外面とも丹塗り痕がみられる。口縁端部は下方に垂下する。326は口径16.6cmを測る。口縁端部は内側に短く屈曲する。内表面はケズリ調整。327は復元口径8cm、復元器高4.1cmを測る。328は器台である。復元底径11.2cmを測る。内外面とも縦方向にケズリ調整。

SK1

SK1は2トレンチで検出された。全景は不明で、黒褐色の埋土であった。遺構検出面で遺物が検出された。遺構は掘り下げず、この遺物のみを取り上げた。329～332は弥生土器の甕である。329は口



42 図 SK-1 出土遺物図 (S = 1/4)

縁部を短く屈曲させる土器である。口縁端部に刻みを施す。330 は口縁直下に断面三角形の刻目突帯をめぐらすものである。復元口径 18.8cm を測る。外面はハケメ調整。331 は口縁部を「く」字に屈曲させる。口縁端部は短く上方へのびる。332 は口縁直下に「M」字の突帯をめぐらすもの。333～335 は弥生土器の壺である。333 は口縁部と胴部の屈曲直下に「M」字突帯をめぐらす。外面はミガキ調整。334 の口縁端部は方形に肥厚し、貝殻による鋸歯紋を施すもの。外面はハケメ、内面はミガキ調整。335 は底径 4 センチを測る。内外面とも摩滅が著しい。

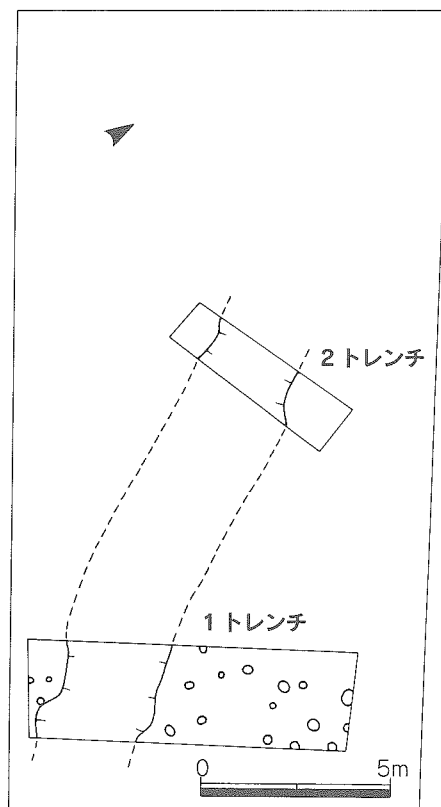
(11) 平成 12 年度調査

平成 12 年度調査区は平成 9 年度調査区の隣接地でおこなった。前年度まで検出していた溝状遺構の続きを確認することを目的とした。調査区に 2 本のトレンチを設定し人力で掘り下げた。1 トレンチでは溝状遺構 1 条 (SD1)、ピット 18 基、2 トレンチでは溝状遺構 1 条 (SD1) であった。1 トレンチの溝状遺構を一部掘り下げ遺物を取り上げた。

(12) 遺構、出土遺物

SD1

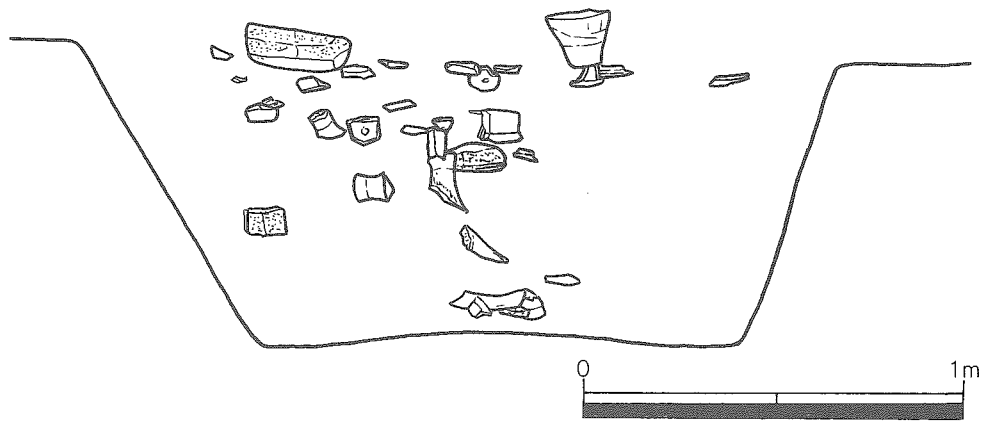
SD1 は 1 トレンチの南側と 2 トレンチの中央で検出された。前年度まで検出してきた溝状遺構の続きと判断した。溝の幅は約 2m、深さ約 80cm、形状は断面逆台形を呈する。336～376 は弥生土器の甕である。336 は口縁端部に断面三角形の刻目突帯を有するものである。337～363 は口縁部を「く」字に屈曲させるもの。337 は内外面とも調整不明。338 はナデ調整。339 は外面ヨコナデ。340、341、342 は内外面とも摩滅し調整不明。343 は外面ハケメ調整。344 は外面ナデ調整。345 は外面ハケメ調整。346、347 は内外面とも調整不明。348 は外面ヨコナデ調整。349 は復元口径 25.6cm を測る。外面はヨコナデ調整。350 は復元口径 25.8cm を測る。口縁端部は肥厚ぎみ。外面はハケメ調整。351 は復元口径 24.6cm を測る。外面はハケメ調整。352 は復元口径 27cm を測る。外面はハケメ調整。353 の端部は短く上方へのびる。354 の口縁部は内側に僅かに湾曲する。355 の口縁端部は短く上方へのびる。356 の口縁端部は短く内側に屈曲する。357 は復元口径 31cm を測る。内外面とも調整不明。358～363 は胴部に断面三角形の突帯をめぐらすもの。358 の外面はハケメ調整。359 の口縁部は僅かに内側に湾曲ぎみ。360 の口縁端部は僅かに肥厚する。361 の口縁端部は短く上方へのびる。362 の口縁端部は肥厚し内側に跳ね上げる。363 は 2 条の断面三角突帯をめぐらす。口縁端部は肥厚する。364～381 は甕の底部になる。364 の色調は褐色で焼成は良好。365 は底径 7.6cm を測る。外面はハケメ調整。366



43 図 平成 12 年度調査区図 (S = 1/200)

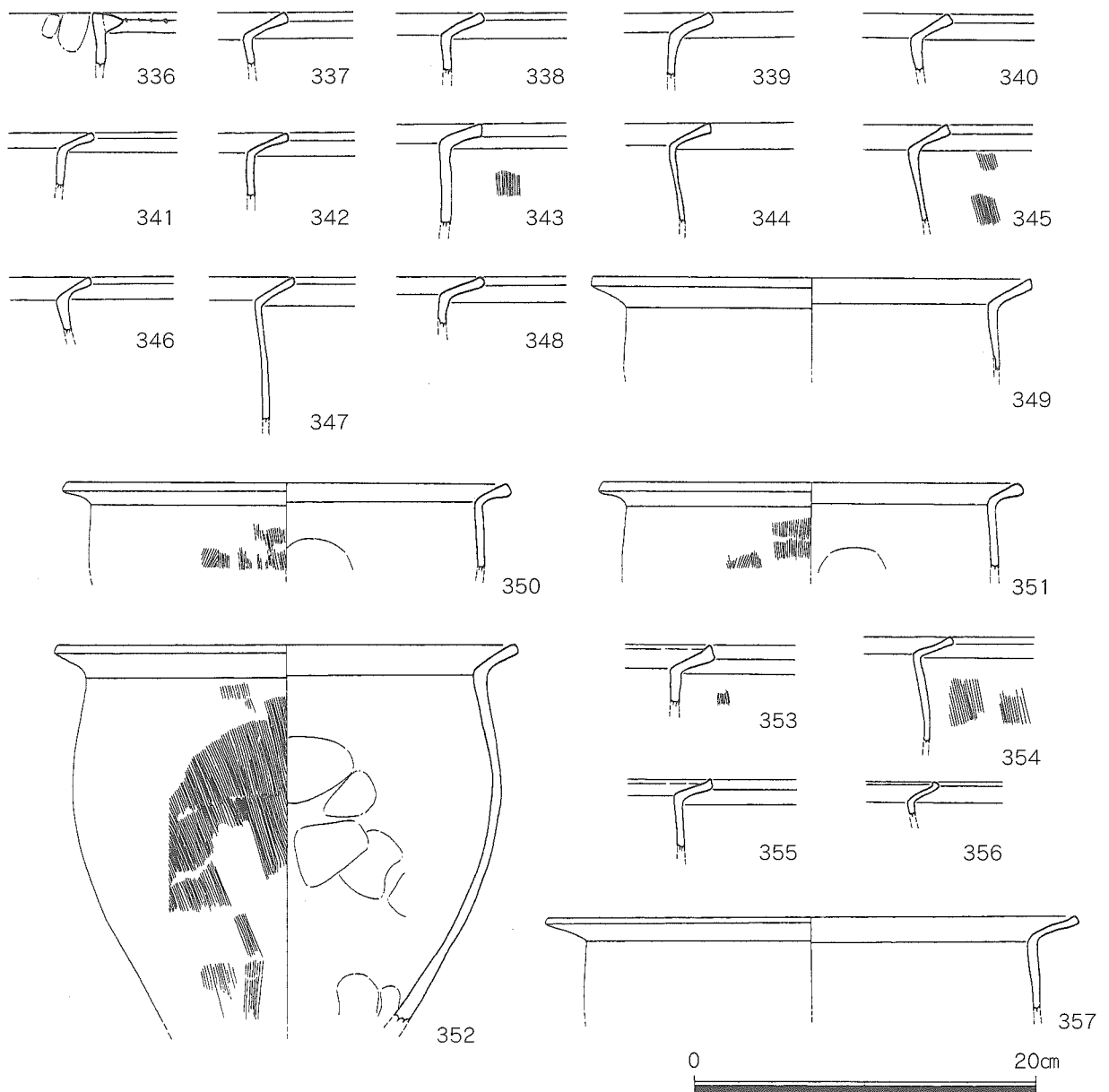


26.500m

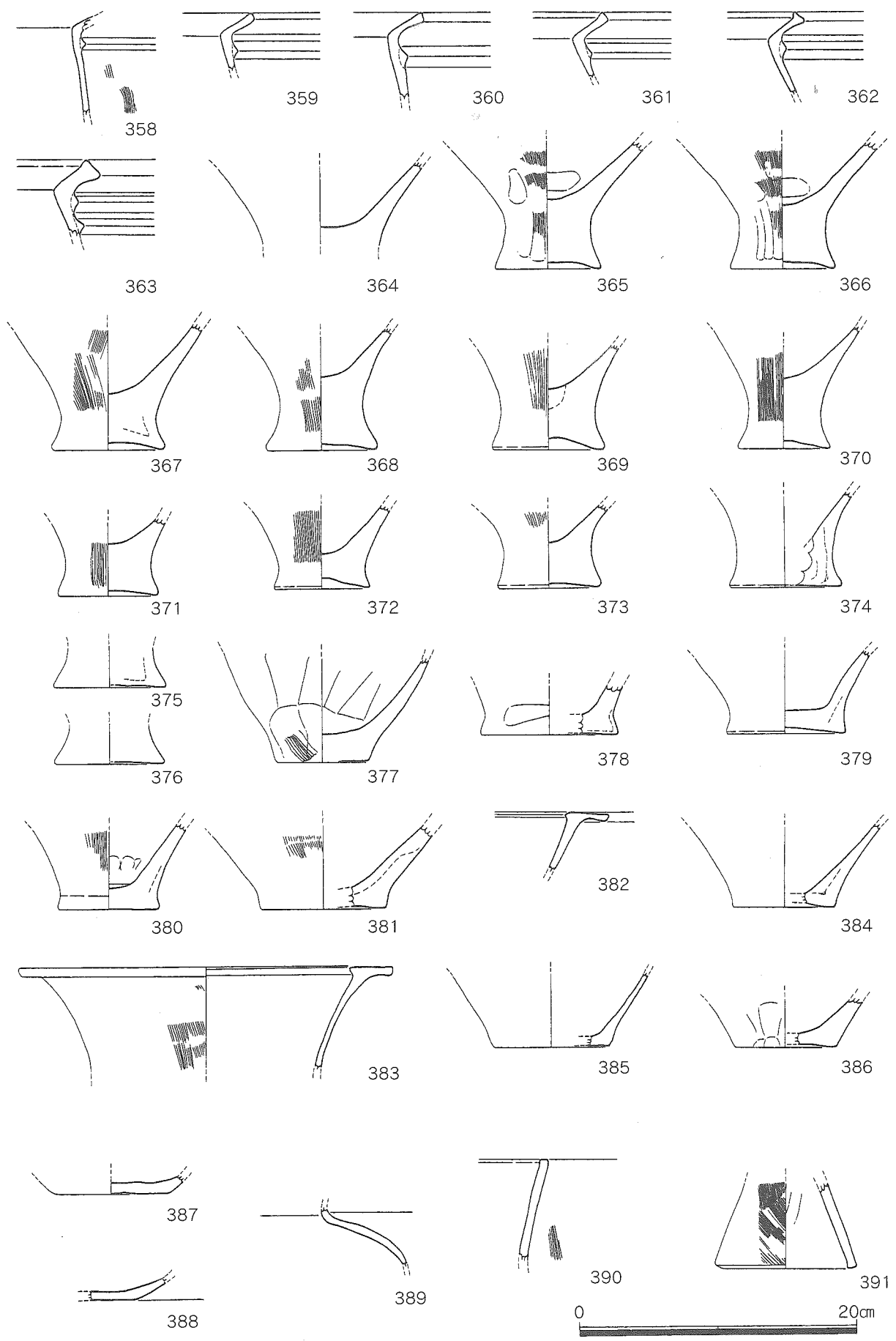


44 图 SD-1 实测图 (S = 1/20)

は底径 7.6cm を測る。底部外面はハケメ調整後、縦方向のケズリ調整。367 は底径 7.8cm を測る。外面はハケメ調整。368 は底径 7.6cm を測る。底にススが付着か。369 は復元底径 7.8cm を測る。370 は底径 6.6cm を測る。丁寧な作りである。371 は復元底径 7cm を測る。外面はハケメ調整。372 は底径 7cm を測る。上げ底。373 は底径 7.2cm を測る。374 は復元底径 8cm、375 は復元底径 8.2cm を測る。376 は復元底径 8cm を測る。平底。377 は底径 6.6cm を測る。内外面はケズリ調整。378 は復元底径 9.9cm を測る。379 は底径 8.4cm。外面のハケメ調整が僅かにのこる。380 は底径 7.2cm を測る。外面に 5mm ほどの白色粒がみられる。381 は復元底径 9cm を測る。外面はハケメ調整、内面は縦方向のケズリ調整。382 は高坏か壺の口縁部。口縁断面は鋤先状を呈する。383 は壺の口縁部。口縁断面は鋤先状を呈する。外面はハケメ調整。384 は壺の底部か。復元底径 7.3cm を測る。385 は壺の底部である。復元底径 8.3cm を測る。386 は復元底径 7.2cm を測る。387 は底径 6cm、389 は壺の胴部である。390、391 は器台である。390の外面はハケメ調整。391は復元底径 10.2cm を測る。外面はハケメ調整。



45 図 SD-1 出土遺物図 (S = 1/4)



46图 SD-1 出土遺物图 (S = 1/4)

第4章 小 結

平成6年度から継続で行われた調査の目的は昭和57年に大分県指定の史跡となったボウガキ遺跡の広がりを確認することが当初の目的であった。前記したがボウガキ遺跡は縄文後期の住居跡、住居内で土坑墓が検出されている。隣接地には入垣貝塚も周知され周辺に縄文集落の展開が期待された。しかし平成6年度調査区以外で縄文の遺構は確認されず、弥生時代の遺構の存在が際立った。平成16年度この台地の農道整備事業に伴い確認調査が行われた。昭和57年度調査区の隣接地で縄文後期の住居跡が検出された。住居内から貝層が検出され、住居廃絶後の使用形態の差異が注目された。農道部分をトレンチ状に掘削したのみであるが、農道を北東方向に進むにつれ縄文時代の遺構、遺物は皆無の状態であった。また平成7年度以降の調査区でも縄文の遺構、遺物は検出されていない。縄文の集落は福島台地上の南西部に立地するものであろうか。

また平成7年度に検出され12年度まで探査した溝状遺構は直線で160m確認された。平成7年度調査区で溝状遺構から検出された弥生土器はばらばらに粉碎され一括廃棄された資料であった。平成7年度に溝状遺構(SD1)で検出され、掲載した主要な土器は、甕口縁部39点、壺10点、高坏4点、である。甕は大きく4タイプに分類される。

①口縁部を「く」字もしくは「L」字に屈曲するものが34点。②「く」字に屈曲し胴部に突帯をめぐらすものが3点。③口縁部直下で胴部に刻目突帯を有するものいわゆる下城式土器1点。④口縁端部に断面三角形の刻目突帯と、胴部にも同様の突帯をめぐらすもの1点。

壺は口縁部8点、胴部3点で大きく4タイプに分類される。

①口縁部は断面鋤先状5点。②口縁端部が肥厚し水平面に貝殻による山形紋、端部外周に竹管紋をめぐらすもの1点。また胴部に貝殻による木の葉紋を施すもの1点、山形紋1点。③長頸壺で内外面にミガキ調整のもの1点。④口縁部が素口縁で朝顔型に開くもの1点である。

高坏は4点で1タイプのみ。

①口縁部が鋤先状のもので内外面ともミガキ調整のもの4点。

以上、甕③、④、壺②、など前期末のものがまじるが基本的に甕①、壺①高坏①のタイプが主体である。これらの土器は宮ノ原IV期、台ノ原II式Bに並行するもので須玖I式が主体である。

また平成9年度調査区の土坑(SK1)からも一括廃棄された土器が検出されている。掲載した主要な土器は甕口縁部30点、壺口縁部3点、高坏4点、である。

甕は大きく5タイプに分類される。

①口縁部を「く」字に屈曲させ端部は上外方へのびるもの10点。②①のタイプで胴部に三角突帯をめぐらすもの1点。③口縁部を「く」字に屈曲させ、端部が僅かに肥厚するもの、僅かに上方に跳ね上げるもの14点。④③のタイプで口縁直下屈曲部に三角突帯をめぐらすもの1点。⑤口縁部が「L」字に屈曲し断面鋤先状を呈するもの4点である。

壺は2タイプに分類される。

①口縁部は断面鋤先状のもの1点。②口縁部が素口縁で朝顔型に開くもの2点

高坏は2タイプに分類される。

①口縁部は断面鋤先状のもの3点。②口縁部は「く」字に屈曲し、胴部が張るもの1点。

以上甕は①、③、高坏は①が主体で平成7年度調査区のSD1では少数であった甕の③口縁端部が跳ね

上げられるもの、少数であるが⑤の口縁部が垂下気味の鋤先状のもので胴部に「M」字の突帯をめぐらすものが認められ、須玖Ⅱ式が主体である。

平成7年度に検出された溝状遺構は福島台地を南東から北西に160m続く。台地はその両端で削られこれ以上その姿を確認できない。溝状遺構の性格は判断できなかったが、福島台地上で弥生時代中期の大規模な集落が存在することが明らかになった。近年、台地上では個人住宅が建ち始めており、開発に対する基礎資料として大きな成果を得た。

〈参考文献〉

- 『棒垣遺跡、ホヤ池窯跡』 中津市文化財調査報告第15集 1994
『沖代地区条里跡、福島遺跡東入垣地区』 中津市文化財調査報告第17集 1996
『沖代地区条里跡(Ⅱ)、福島遺跡東入垣地区(Ⅱ)』 中津市文化財調査報告第18集 1997
『福島遺跡入垣地区(Ⅲ)、定留遺跡向地区』 中津市文化財調査報告第22集 1998
『福島遺跡(Ⅳ)東入垣地区、定留遺跡八反ガソウ地区』 中津市文化財調査報告第23集 1999
『大悟法条里跡池ノ下地区、福島遺跡入垣地区、長者屋敷遺跡』
中津市文化財調査報告第25集 2000
『台ノ原遺跡』 大分県文化財調査報告 第33輯 1975
『安心院宮ノ原遺跡』 安心院町教育委員会 1984
『二千年の鼓動』 大分県立歴史博物館 2003年特別展



図版. 1



H6 年度 4 トレンチ

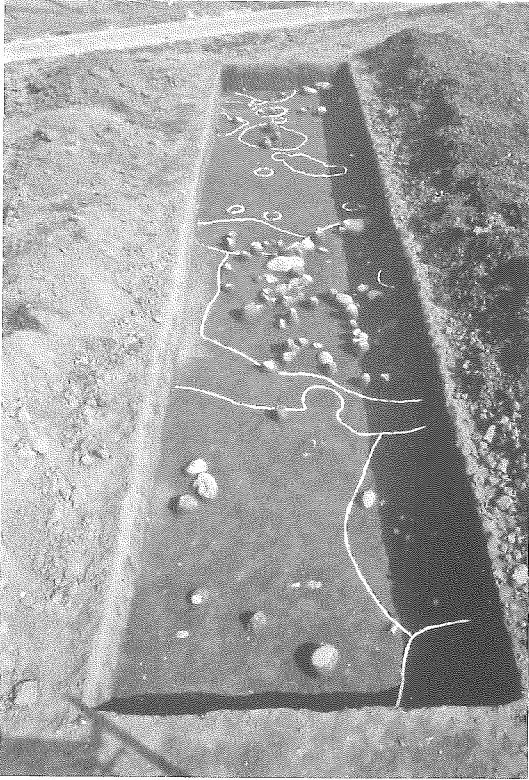
H6 年度 集石-1



H6 年度 ST-1

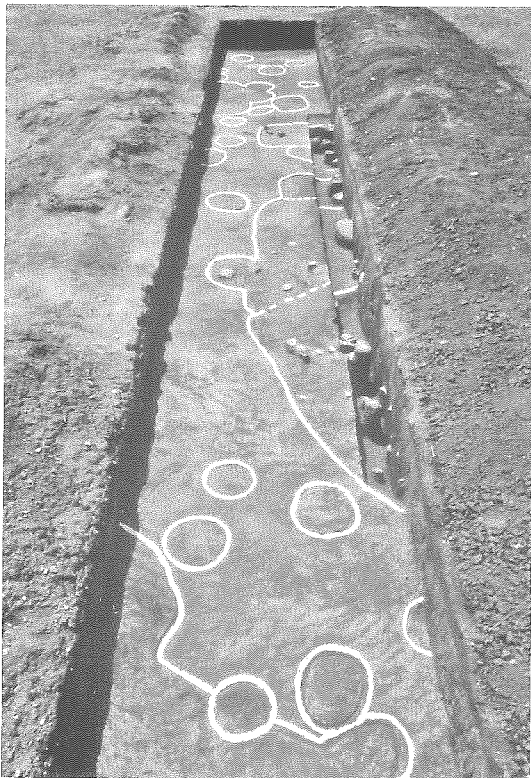
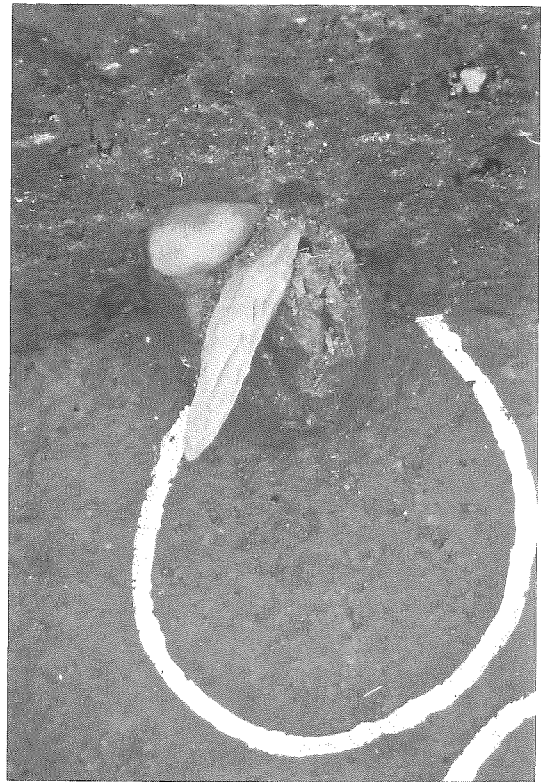


図版 .2



H6 年度 7 トレンチ

H7 年度 石剣出土状況

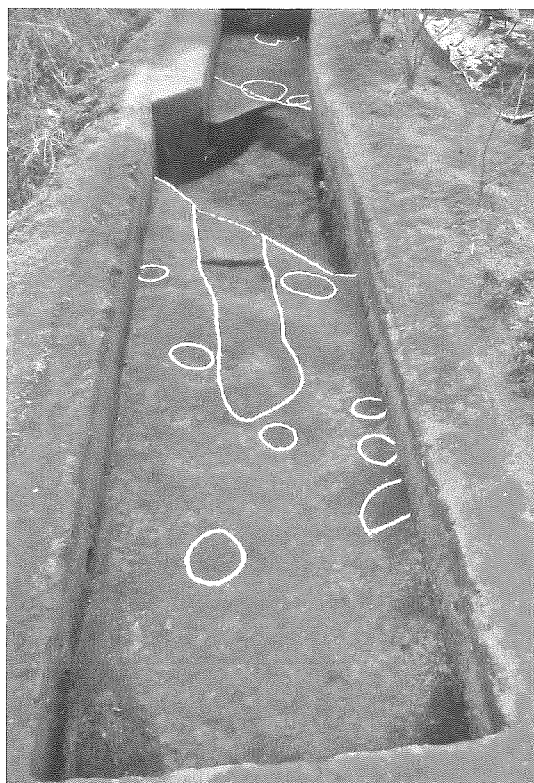
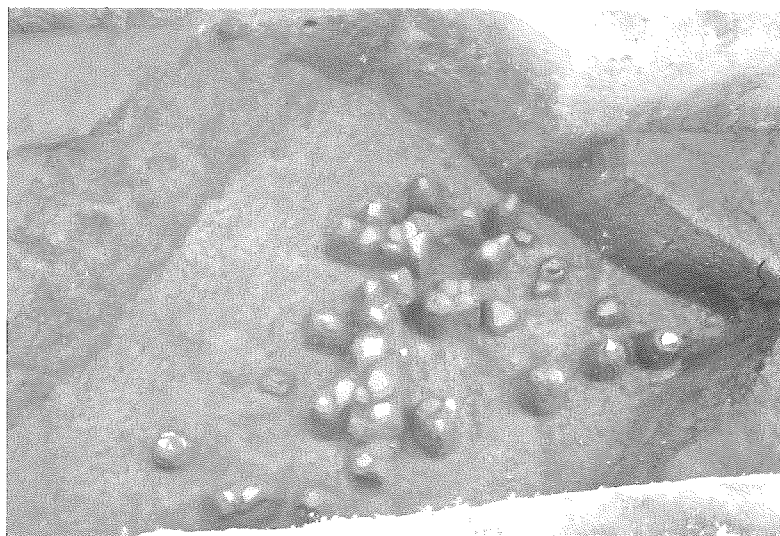


H7 年度 1 トレンチ

H7 年度 SD -1



H8 年度 SD -1



H8 年度 1 トレンチ

図版 .4



H9 年度 発掘風景

H9 年度 SK -1



H9 年度 3 トレンチ



図版 .5



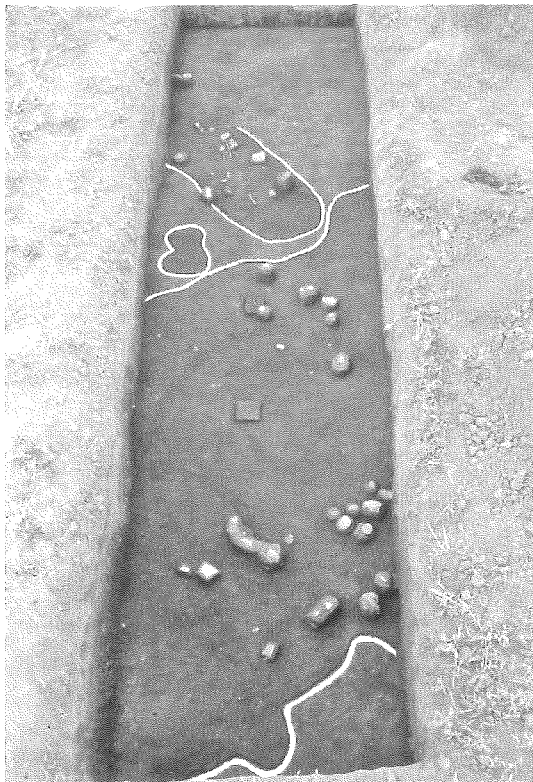
H9 年度 1 トレンチ

H10 年度 発掘前風景



H10 年度 SD -1





H10年度 2トレンチ

H12年度 発掘前風景



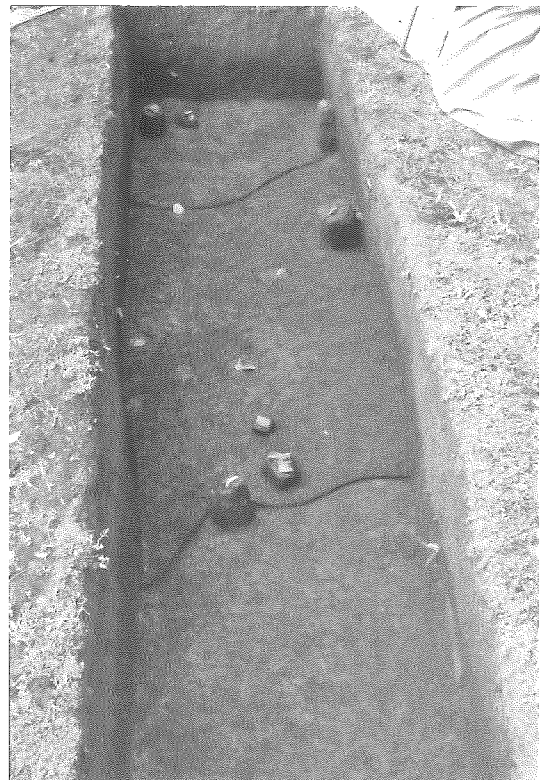
H12年度 発掘風景



図版.7



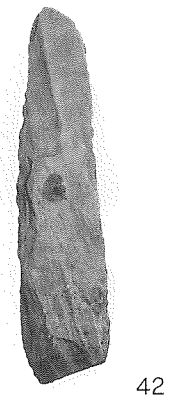
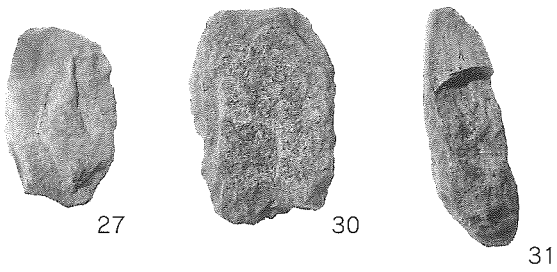
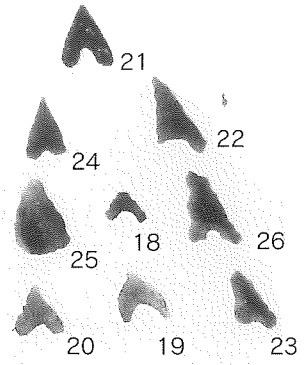
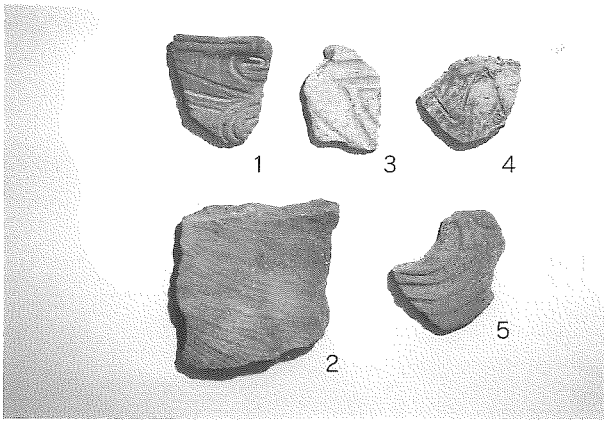
H12年度 1 トレンチ

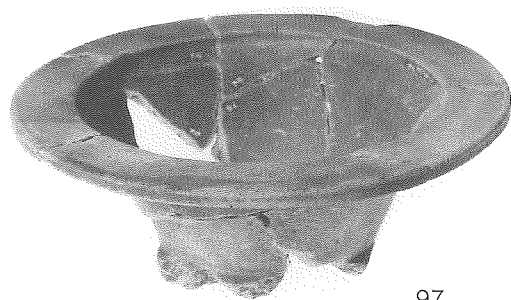


H12年度 2 トレンチ



H12年度 1 トレンチ

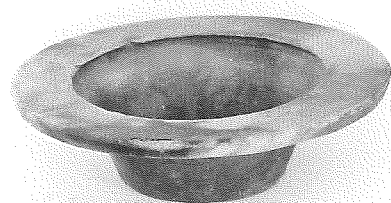




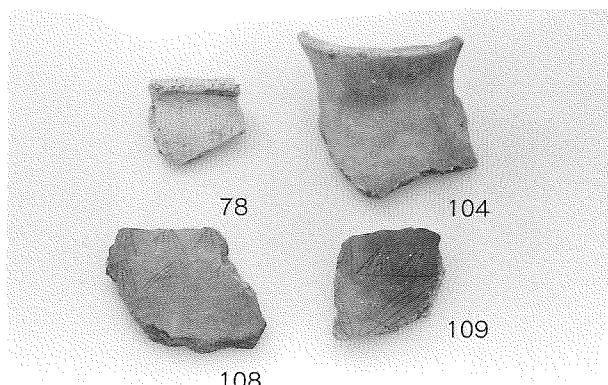
97



99



98

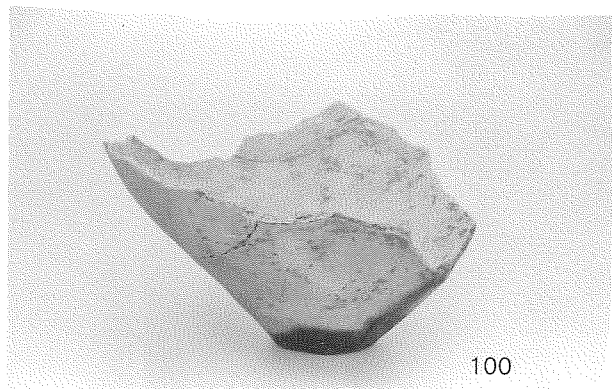


78

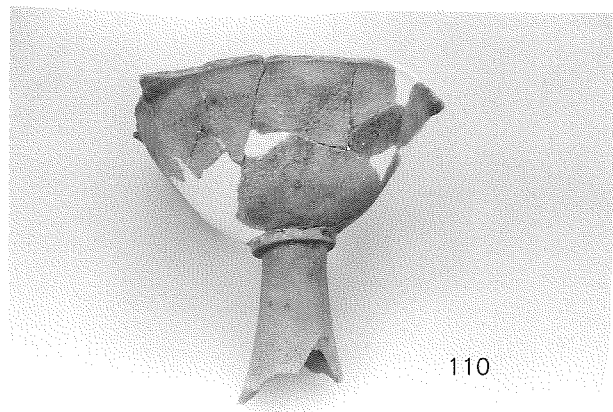
104

108

109



100



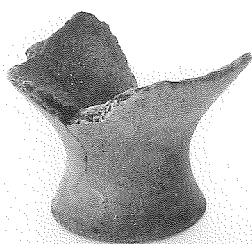
110



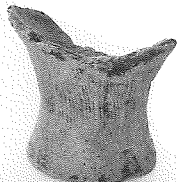
111



128



129



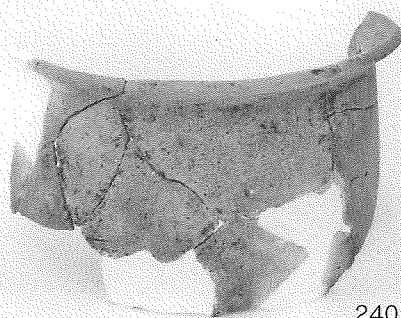
134



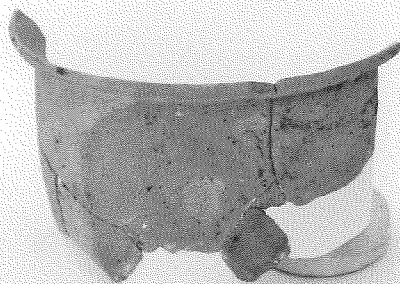
224



236



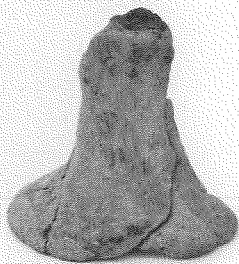
240



241



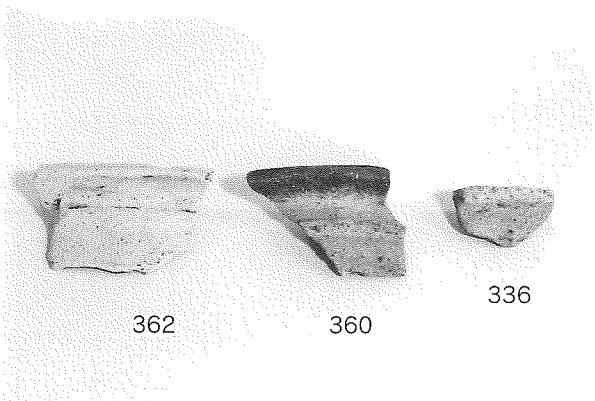
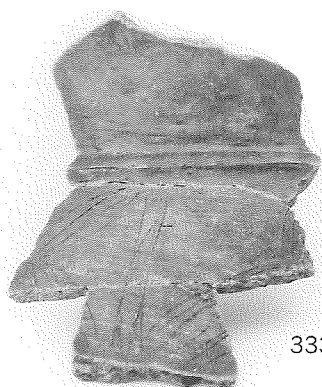
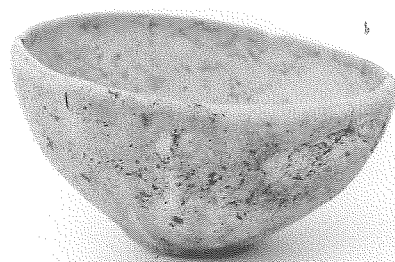
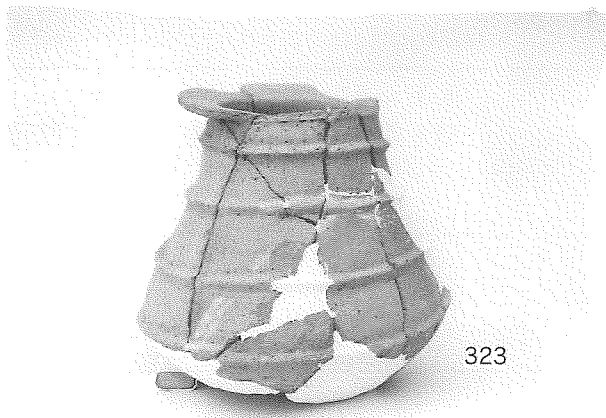
250



251



297





報告書抄録

ふりがな 書名	ふくしまいせき 福島遺跡														
副書名															
巻次															
シリーズ名	中津市文化財調査報告														
シリーズ番号	第43号														
編著者名	花崎 徹														
編集機関	中津市教育委員会														
所在地	大分県中津市豊田町14-3														
発行年月日	2008年3月19日														
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因							
		市町村	遺跡番号												
福島遺跡	大分県 中津市	44203	101051	33° 33′ 23″	131° 13′ 52″	19950202 ~ ₂	125m ²	遺跡確認							
						19950314 19950619 ~ ₃			53m ²						
						19950930 19970123 ~ ₄	20m ²								
						19970331 19970527 ~ ₅			67m ²						
						19970630 19980522 ~ ₆	47m ²								
						19980617 20010216 ~ ₇			32m ²						
						20010319									
						所収遺跡名	種別		主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
						福島遺跡	集落跡		弥生時代	溝状遺構 土坑	弥生土器	弥生時代中期の集落跡が福島台地に展開する。			

福島遺跡発掘調査報告書
ボウガキ地区、入垣地区、東入垣地区
中津市文化財調査報告 第43集

2008年3月19日

発行 中津市教育委員会
印刷 高橋印刷所